

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集

郡領ノ一遺跡

福岡県山門郡瀬高町所在遺跡の調査

2006

福岡県教育委員会

郡領ノ一遺跡

福岡県山門郡瀬高町所在遺跡の調査

序

福岡県教育委員会では、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）の委託を受け、平成 13 年度から九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本書で報告する郡領ノ一遺跡が所在する山門郡瀬高町では文化財発掘調査が終了し、現在、出土遺物の整理作業を行っているところです。今後、調査の成果を順次報告していく予定です。

さて、本遺跡周辺は以前から土器の散布地として知られていますが、今回の調査で本遺跡が弥生時代、古墳時代の集落であることが確認されました。これにより、矢部川中流域における人々の生活の様子を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査、整理作業ならびに報告書作成にあたり、多くの方々に御協力いただきましたことを深く感謝いたします。

平成 18 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

森山 良一

例言

1. この報告書は、平成 16 (2004) 年度に福岡県教育委員会が鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けて実施した九州新幹線の建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第 4 集である。
2. 本書に掲載した遺構写真は今井が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は九州航空株式会社へ委託した。
3. 本書に掲載した遺構図は今井が実測し、江崎裕子、堤弘光、溝上潔、横尾友子の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は、国土調査法第Ⅱ座標系に基づく座標北である。
5. 出土遺物の整理・復元作業は大庭孝夫の指導のもと、九州歴史資料館で行った。
6. 出土遺物の実測は今井のほか、西原節子の協力を得た。
7. 遺構、遺物の製図は今井のほか、豊福弥生、原カヨ子、江上佳子が行った。
8. 本書の執筆は今井が行った。

本文目次

第1章	はじめに	1
I	調査にいたる経過	1
II	調査の組織	2
第2章	位置と環境	3
I	地理的環境	3
II	歴史的環境	3
第3章	調査の記録	8
I	遺跡の概要	8
II	遺構と遺物	8
第4章	おわりに	32

図版目次

図版 1	(上) 調査区遠景 (空中写真 北を望む)
	(下) 調査区北区全景 (空中写真)
図版 2	(上) 1号竪穴住居跡 (東から)
	(中) 1号竪穴住居跡カマド (東から)
	(下) 2号竪穴住居跡 (東から)
図版 3	(上) 2号竪穴住居跡カマド (東から)
	(中) 3号竪穴住居跡 (東南から)
	(下) 3号竪穴住居跡カマド (東南から)
図版 4	(上) 3号竪穴住居跡カマド (東南から)
	(中) 4号竪穴住居跡 (東南から)
	(下) 4号竪穴住居跡カマド (東南から)
図版 5	(上) 5号竪穴住居跡 (東から)
	(中) 5号竪穴住居跡カマド (東から)
	(下) 6号竪穴住居跡 (東南から)
図版 6	(上) 7号竪穴住居跡 (東から)
	(中) 7号竪穴住居跡完掘状況 (東から)
	(下) 1号竪穴状遺構・2号土坑 (西から)
図版 7	(上) 2号竪穴状遺構 (東から)
	(中) 1号土坑 (東から)
	(下) 3号土坑 (南から)
図版 8	出土土器①
図版 9	出土土器②・出土石製品

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	4
第2図	周辺地形図 (1/1,000)	7
第3図	遺構配置図 (1/300)	折込
第4図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	9
第5図	1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	9
第6図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	10
第7図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	10
第8図	2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	11
第9図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	11
第10図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	12
第11図	3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	13
第12図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	14
第13図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	16
第14図	4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	16
第15図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	17
第16図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	18
第17図	5号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	18
第18図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	19
第19図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	20
第20図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	20
第21図	6・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	21
第22図	1・2号竪穴状遺構実測図 (1/40)	22
第23図	1号竪穴状遺構出土土器実測図 (1/3・1/4)	22
第24図	1～3号土坑実測図 (1/40)	23
第25図	2・3号土坑出土土器実測図 (1/3・1/4)	24
第26図	1～3・5号溝土層断面図 (1/40)	25
第27図	2～5号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)	26
第28図	包含層出土土器実測図 (1/3・1/4)	27
第29図	出土土製品実測図 (1/2)	29
第30図	出土石製品実測図① (1/2)	30
第31図	出土石製品実測図② (1/3)	31

第1章 はじめに

I 調査に至る経過

九州新幹線は国民経済の発展および国民生活領域の拡大ならびに地域の振興を図ることを目的に、「全国新幹線整備法」に基づき建設される新幹線鉄道である。博多を起点に船小屋、八代を經由して鹿児島に至る総延長 257 kmのうち、新八代－鹿児島間については既に平成 16 年 3 月 13 日に部分開業している。九州新幹線の全線開業は社会、経済、文化活動の活性化、新たな産業の立地、観光産業の振興等に寄与すると、おおいに期待されている。

九州新幹線全区間のうち船小屋－新八代間については、平成 8 年 12 月 25 日の政府与党合意により新規着工区間として示され、平成 10 年 3 月 12 日に工事実施計画認可、同年 3 月 21 日に建設工事が起工された。

福岡県は平成 10 年 4 月 8 日に企画振興部交通対策課のもと、関係部局で九州新幹線鹿児島ルート情報連絡会議（以下 情報連絡会議）を設置し、鹿児島ルートに関する情報等についての連絡調整を行うこととした。

文化財については、平成 10 年 6 月 18 日付で日本鉄道建設公団九州新幹線建設局（現 鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局 以下、新幹線建設局）から福岡県教育委員会総務部文化財保護課（以下 文化財保護課）に対して、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の有無および取り扱いについて照会があった。これに対し平成 10 年 7 月 13 日付で周知の遺跡の範囲を示し、用地買収が完了した時点で現地の踏査および全線の試掘調査が必要である旨を回答した。

工事の具体的な計画は平成 10 年 8 月 27 日に情報連絡会議において新幹線建設局から提示され、測量、ボーリング調査等の各種調査、今後の発注時期等についての説明が行われた。実際の工事は高田トンネル部分の南側で、文化財が存在しないことを確認したうえで、平成 10 年 12 月 19 日に着工した。

本書で報告する郡領ノ一遺跡が所在する山門郡瀬高町部分については、平成 14 年 6 月 3 日付および平成 15 年 12 月 1 日付で試掘調査を依頼された。これを受けて文化財保護課は、平成 14 年 11 月から平成 17 年 12 月までの間に数度にわたって試掘調査を実施し、そのうち、遺構が確認された地点を対象に本調査を実施してきた。現在までに瀬高町内における新幹線関係の埋蔵文化財発掘調査はすべて終了し、本遺跡のほかに山門前田遺跡、山門北池遺跡、藤ノ尾垣添遺跡、小川柳ノ内遺跡、松田掛畑遺跡が確認され、現在整理・報告中である。

本遺跡は、平成 15 年 12 月に実施した試掘調査の結果遺構が確認された 1,600 m²を対象に発掘調査を実施した。平成 16 年 5 月 6 日に対象地の表土剥ぎを開始し、6 月 8 日から作業員による作業を開始した。9 月 16 日に北区の空中写真を撮影し、9 月 24 日に作業員による作業を終了した。9 月 27 日に埋め戻しを終了し、全ての作業を完了した。

II 調査の組織

発掘調査および報告書作成の関係者は以下のとおりである。

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局

	[平成 15 年度]	[平成 16 年度]	[平成 17 年度]
局 長	高山 博文	高山 博文 北川 隆	北川 隆
次 長	伊神 英二	伊神 英二	関根 茂
用地第一課長	関根 茂	田中 等	田中 等
用地第一課課長補佐	有屋田幸郎 木佐一正和	木佐一正和	木佐一正和
用地第一課担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久
工事第三課長	石徳 博行	石原 博行 北原 太一	北原 太一
工事第三課課長補佐	上野 登	上野 登	上野 登
大牟田鉄道建設所長	渡邊 修	渡邊 修	長谷川正明
同所担当副所長	古賀 勝美	石津 範彦	江口 義次

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	[平成 15 年度]	[平成 16 年度]	[平成 17 年度]
総 括			
教 育 長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教 育 次 長	三瓶 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔
総 務 部 長	清水 圭輔	中原 一憲	中原 一憲
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	久芳 昭文
副 課 長			川述 昭人
参事兼課長技術補佐	川述 昭人 木下 修	川述 昭人 木下 修	木下 修
参 事		新原 正典	新原 正典
課 長 補 佐		安川 正郷	安川 正郷
参事補佐兼管理係長	古賀 敏生		稲尾 茂
参 事 補 佐 兼	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲
調 査 第 一 係 長			
参 事 補 佐 兼	中間 研志	中間 研志	飛野 博文
調 査 第 二 係 長			
庶 務			
管 理 係 長		稲尾 茂	
主 任 主 事	末竹 元	石橋 伸二	
事 務 主 査			石橋 伸二
調 査 ・ 報 告			
主 任 技 師	秦 憲二 (試掘調査)	今井 涼子 (発掘調査)	今井 涼子 (報 告)

第2章 位置と環境

I 地理的環境

本遺跡が所在する瀬高町は筑後平野の南奥に位置する。北は矢部川を挟んで筑後市・八女市に面し、東は山門郡山川町・八女郡立花町、西は柳川市、南は三池郡高田町と境を接する、総面積 37.73 km²の町である。

町の東部には筑肥山地に連なる清水山系がひかえる。西に向かって中起伏山地から小起伏山地へと高度を減じ、古僧都山（標高 286m）、清水山（標高 294m）が連なる。主に変成岩より成っている。さらに 200m 以下の緩斜面へと変化し、その裾部には一部砂礫台地が形成される。

一方、町の北東部から西南部にかけて町境を成しながら流下する矢部川は、大分、熊本両県の境にある釈迦岳、国見岳に源を発し、町の南端を東西に流れる飯江川を合わせ、有明海に注ぐ。瀬高町は扇状地性低地が広がる矢部川中流域にあたり、町の大部分を占める平端部は肥沃な灰色低地土壌で、一部に礫質灰色低地土壌がみられる。排水良好で生産力が高く、豊富な水、温暖な気候と相まって、水稻、麦類、野菜の栽培が盛んである。

町の北東から南西に国道 209 号、柳川へと伸びる国道 443 号、県道 774 号等の幹線道路が走る。いずれも古くからの主要道路であり、筑後地方南部における交通の要衝であったことがわかる。特に町西部、瀬高橋の辺りは柳河藩の倉がおかれ、物資の集積場として繁栄をみた。現在では、町東部の山裾を九州縦貫自動車道、中央を JR 鹿児島本線が通り、福岡市まで 1 時間圏内に位置する。

II 歴史的環境

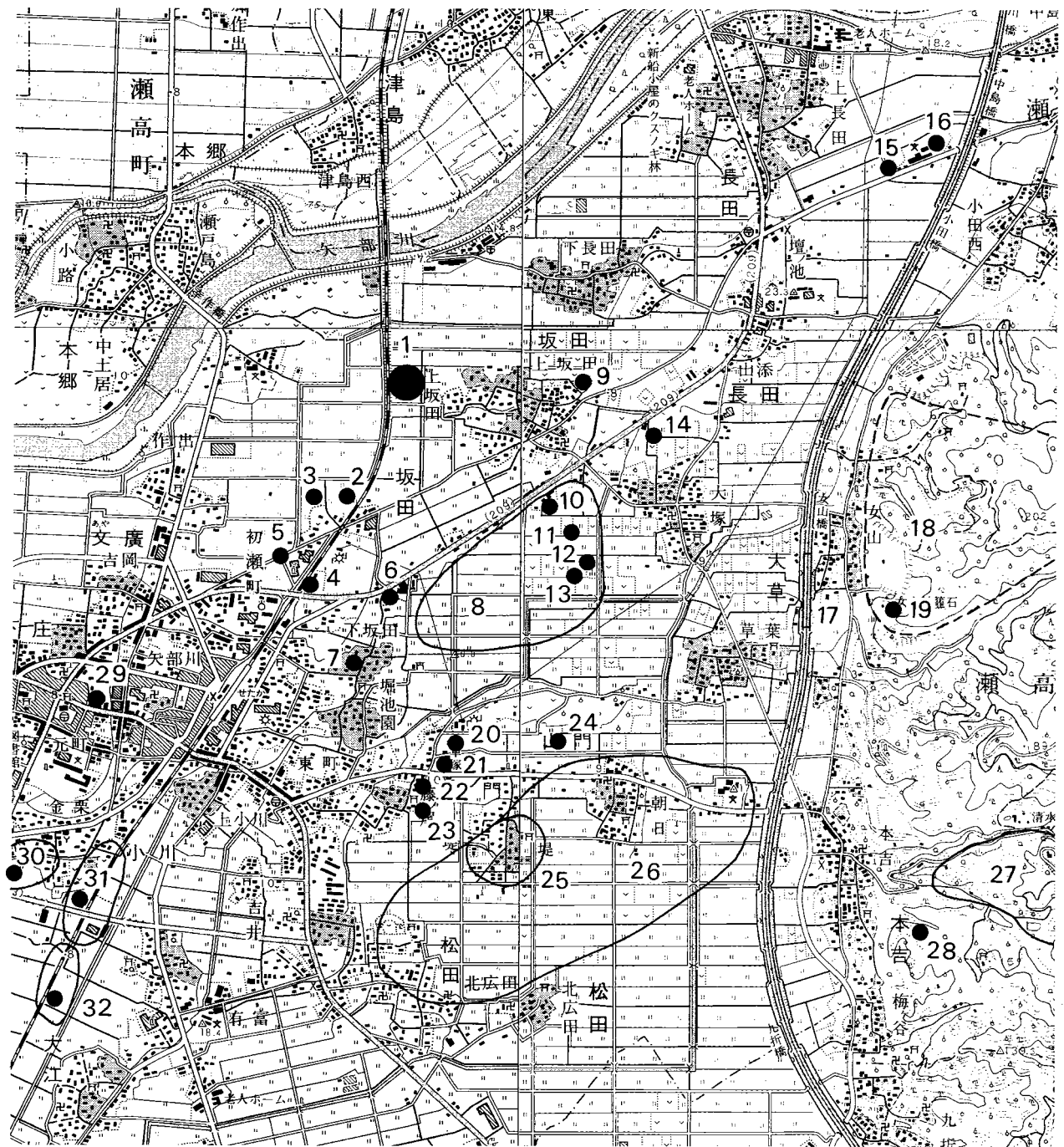
瀬高町内での文化財調査は 1930 年頃からみられ始める。1950 年代には九州大学の鏡山猛氏によって、土取り工事により破壊を受けていた多くの遺跡に対して調査・記録が行われた。また、地元の郷土史家村山健治氏は山門郡一帯の分布調査を実施し、その成果をパンフレットなどで公表してきた。福岡県教育委員会によって本格的な発掘調査が実施されるようになるのは 1960 年代末からである。註1

さて、代表的な遺跡を列挙しながら各時代の状況について説明する。

瀬高町内において人々の生活の痕跡が確認できるのは旧石器時代まで遡る。町東部の山麓で村山氏によって石器が採集されており、清水小谷遺跡、大谷遺跡などが知られている。

しばらく空いて、縄文時代後・晩期の遺構、遺物が坂田中園遺跡や権現塚北遺跡で確認されている。両遺跡とも標高 9m ほどの微高地に所在する。坂田中園遺跡は 1950 年代半ばに鏡山氏らにより調査が行われ、注口土器などが出土している。坂田遺跡では縄文土器の散布が確認されている。

弥生時代になると甕棺墓群を中心とした墳墓遺跡が目立ち、鉾田遺跡、定角遺跡、権現塚北遺跡、藤ノ尾垣添遺跡、松延遺跡があげられる。集落跡は三船山遺跡や藤ノ尾車塚遺跡で確認されており、先述の甕棺墓群との関連が注目される。これらの遺跡は瀬高町のほぼ中央付近の微高地上に展開し、周囲の低湿地を開拓していったようである。ほかに埋納遺構と考えられている女山産女谷遺跡があり、1960 年頃に中広形銅矛 2 点が発見されている。



- | | | | |
|---------------|------------|--------------|--------------|
| 1. 郡領ノ一遺跡 | 9. 上坂田遺跡 | 17. 大道端遺跡 | 25. 堤古墳群 |
| 2. 王塚遺跡 | 10. 坂田中園遺跡 | 18. 女山神籠石 | 26. 山門遺跡群 |
| 3. 坂田遺跡 | 11. 権現塚北遺跡 | 19. 女山産女山谷遺跡 | 27. 清水山古墳群 |
| 4. 初瀬町第一遺跡 | 12. 権現塚古墳 | 20. 車塚古墳 | 28. 成合寺谷1号墳 |
| 5. 初瀬町第二遺跡 | 13. 権現塚南遺跡 | 21. 藤ノ尾遺跡 | 29. 瀬高保育園内遺跡 |
| 6. 坂田ブロック工場遺跡 | 14. 北古賀遺跡 | 22. 北ノ前遺跡 | 30. 金栗遺跡 |
| 7. 下坂田遺跡 | 15. 長田遺跡 | 23. 藤ノ尾垣添遺跡 | 31. 鉾田遺跡 |
| 8. 権現塚遺跡群 | 16. 日掛遺跡 | 24. 御二田遺跡 | 32. 大江遺跡 |

第1図 周辺遺跡分布図

弥生時代を通じて蓄積された生産力は古墳時代に引き継がれ、5世紀代と考えられる前方後円墳の車塚古墳、大型円墳の権現塚古墳、堤古墳群が平地に造営される。また、東方の山麓西斜面には装飾古墳の成合寺谷1号墳を含む多くの群集墳が営まれる。この時期の集落跡には大道端遺跡、フミアガリ遺跡、御二田遺跡、大江南遺跡、北古賀遺跡などがある。

古代の遺跡としては、女山神籠石（国指定史跡 昭和28年11月14日指定）の存在は注目すべきであろう。町東方の標高203mの尾根を最高所として、西側の平野部に向かって土塁線を扇形に築いている。土塁線は推定3km程で、基底部には花崗岩の切石が並ぶ。谷部には水門をもつ切石積みのでんを構築している。ほかに石帯、円面硯が出土した御二田遺跡、井戸から奈良時代の櫛などが出土した金栗遺跡（県指定史跡 昭和33年4月3日指定）がある。

平安時代以降、瀬高町内にも瀬高上庄、瀬高下庄、坂田荘、長田荘など大小の荘園が成立する。関連する遺跡として鉾田遺跡、金栗遺跡、藤ノ尾遺跡、大江北遺跡、大道端遺跡、上庄秀遺跡がある。荘園や名の名称が現在の地名に多く受け継がれており、およその場所を比定することができる。古文書の分析とあわせ、研究の進展が望まれる。

さて、ここで本遺跡が所在する坂田地区の歴史についてもふれておきたい。

『和名類聚抄』によれば、下妻郡は新居、鹿待、村部の三郷、山門郡は四郷で構成されていることが解る。ここには坂田の名は未だ現れない。坂田の地名が初めて古文書に登場するのは、観応3（1352）年「安楽寺領注進状案」^{註2}である。当時の安楽寺領が列挙されており、「坂田荘」は筑後国一円条に挙げられている。

坂田荘の成立時期、その由来は判っていない。しかし、坂田荘の周辺には筑後国内安楽寺領の中核を成す水田荘（現 筑後市水田）を始めとして、下妻荘（現 筑後市下妻）、長田荘（現 筑後市長田・瀬高町長田）と安楽寺領が広がる。坂田荘は水田荘の経営に力が入れられた13世紀半ばから14世紀にかけての時期に大鳥居氏によって開発され、安楽寺領として成立したか、あるいは、郡司、郷司、府官によって開発、寄進されたと考えられる。^{註3}

また、『荘園志料』^{註4}、『荘園分布地図』^{註5}には、現在の行政区画と同様矢部川に郡境をおき、下妻・水田の両荘が下妻郡、長田・坂田の二荘は他の矢部側南岸の荘園と共に山門郡に含められている。久留米藩と柳河藩の藩境が矢部川におかれたことから、山門郡としたのであろう。

しかし、「筑後国知行目録」^{註6}、『筑後地鑑』^{註7}、『南筑明覧』^{註8}、「天保郷帳」^{註9}等の史料には、いずれも坂田荘（坂田村）は下妻郡と記録されており、16世紀末から、明治12（1879）年に山門郡に編入されるまでは下妻郡に属していた。同じく安楽寺領として発展した長田荘（長田村）も同様である。荘園の増加に伴う郡の再編は度々実施されるが、この場合、成立当初から下妻郡であったと考えてよいと思われる。

さて、坂田村は下妻郡10村（本郷、芳司、吉岡、禅院、山中、小田、南長田、下長田、上坂田、下坂田）山門郡12村とともに本郷組へ編成され、柳河藩の支配を受ける。

その後、明治9（1876）年に上坂田村、下坂田村が合併して水上村となり、坂田は字名となる。更に、明治22（1889）年、同40（1907）年、昭和28（1953）年と町村合併が繰り返されて現在の瀬高町となり、坂田はかわらず字名として受け継がれている。

最後に、遺跡名になっている小字名「郡領」について述べておこう。「郡領」という語からは「郡衙領」、「郡司領」の語が連想される。明応6（1497）年「大鳥居充重書下」^{註10}に「水田之内郡領

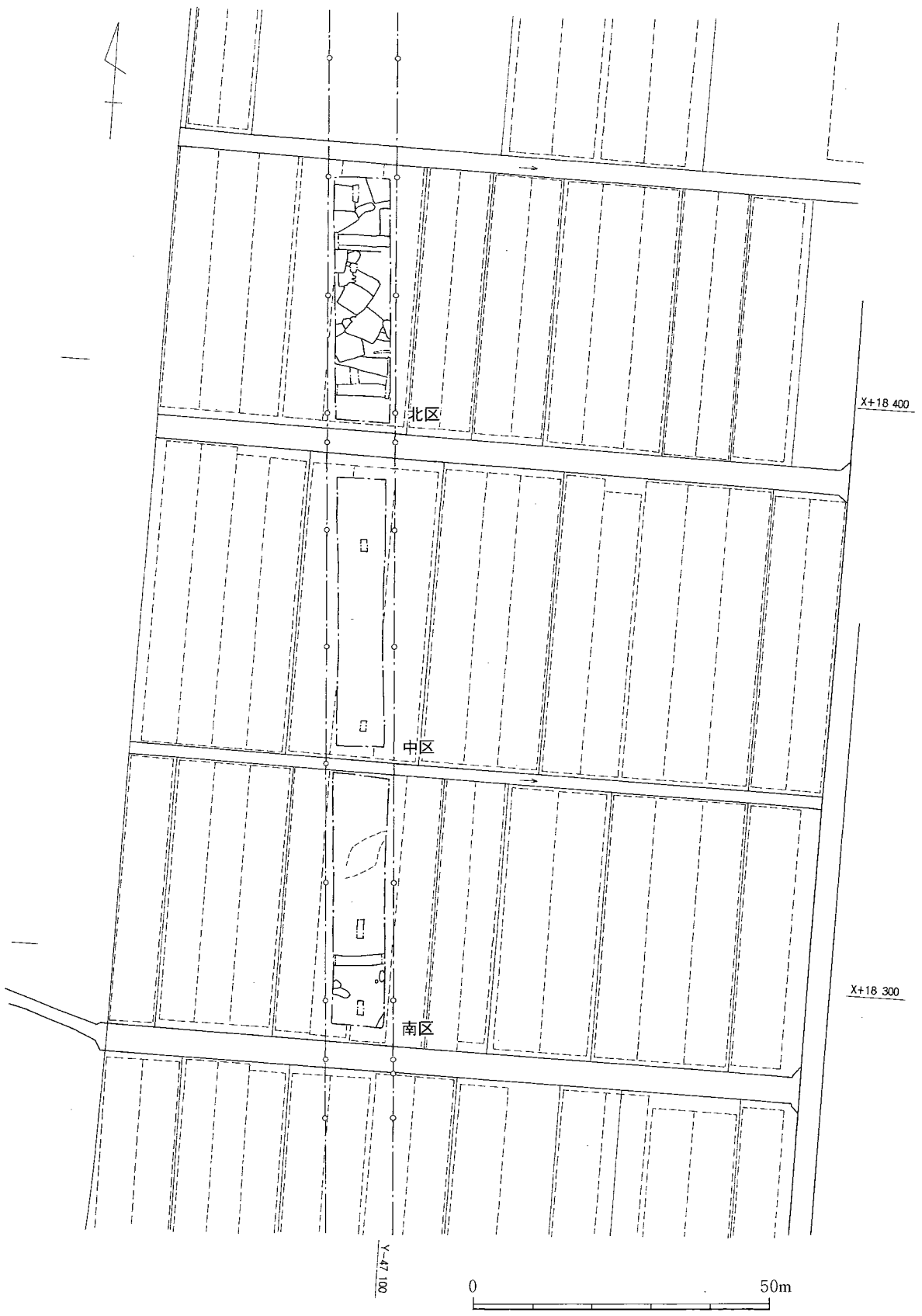
之事(以下略)」とあり、この「郡領」と同義と思われるのだが、具体的に何を指すかは不明である。いずれにしても、郡司との関係の中で考えるべき語なのだろうが、坂田荘の成立事情や経営状況とも関連する可能性があり、興味深い。

註

- 1 瀬高町内における文化財調査の経緯については 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XIV』1977 I 位置と環境 に詳しい。
- 2 観応3(1352)年「安楽寺領注進状案」
〔太宰府天満宮文書／南北朝遺文 3340・太宰府天満宮史料卷十一 P398〕
- 3 正木喜三郎 『大宰府領の研究』 1991 第四章大宰府と寺社(一)
安楽寺領一円荘の多くは府国行政機構を通じての荘園設定、施入であり、実際の立券開発は郡司、郷司、府官など府国行政機構に連なる在地領主層であることが、安楽寺領の特徴の一つと指摘されている。
- 4 清水正健 『荘園志料』
- 5 竹内理三 『荘園分布地図』
- 6 文禄4(1595)年「筑後国知行目録」〔立花文書／福岡県史資料第4集〕
- 7 天和2(1682)年頃に書かれたという。
- 8 明和2(1765)年成立。
- 9 「柳河藩政史料」 『福岡県史資料』第8集
- 10 明応6(1497)年「大鳥居充重書下」〔太宰府天満宮文書／太宰府天満宮史料卷十四 P66〕

参考文献

- 『瀬高町誌』 1974
『筑后市史』 1997
『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編) 福岡県教育委員会 1978
『角川日本地名大辞典』40 角川書店 1988
網野義彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編 『講座日本荘園史 10 四国・九州の荘園』 2005
鏡山猛 「庄園村落の遺構―筑後瀬高下庄の場合―」 『史淵』81 1960
福岡県教育委員会 『大江北遺跡』福岡県文化財調査報告第76集
福岡県教育委員会 『上庄秀遺跡』福岡県文化財調査報告第203集 2005
瀬高町教育委員会 『瀬高地区遺跡群』瀬高町文化財調査報告書第9集 1993
瀬高町教育委員会 『大道端・北古賀遺跡』瀬高町文化財調査報告書第10集 1993
瀬高町教育委員会 『藤ノ尾車塚遺跡』瀬高町文化財調査報告書第11集 1994
瀬高町教育委員会 『御二田遺跡』瀬高町文化財調査報告書第12集 1995
瀬高町教育委員会 『藤ノ尾車塚遺跡Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第13集 1996
瀬高町教育委員会 『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集 1998



第2図 周辺地形図(1/1,000)

第3章 調査の記録

I 遺跡の概要

郡領ノ一遺跡は山門郡瀬高町大字坂田 2557・2565・2567 に所在する。瀬高町では既にほ場整備が終了しており、坂田地区においても水路と作業道路が整然と水田を区切っている。そのため現在では標高 8.5m 程度の平坦地で地形の変化はほとんど認められないが、本来は矢部川によって形成された自然堤防や浅い谷状の地形が入り組んでいると思われる。

坂田地区には、縄文土器が出土した坂田中園遺跡、弥生時代前期から後期の集落と墓地が確認された初瀬町第二遺跡、弥生時代中期の住居址が確認された下坂田遺跡、弥生時代の住居址が確認された坂田ブロック工場遺跡があるほかに、縄文時代後期から鎌倉時代までの土器の散布が確認されている。しかしながら、試掘調査の結果では本遺跡でしか遺構、遺物が認められなかった。自然堤防上に展開していた集落跡等の遺跡が、土取り工事やほ場整備、水田の維持、管理のため削平されたのであろう。本遺跡に北接する水田でも遺構、遺物は確認できていない。

本遺跡は作業用道路と水路によって3区に分断されている。北から順に北区、中区、南区として調査を進めた。

遺構面の標高は北区が 7.8m 前後、中区が 7.35m、南区が 7.3m で、北区が最も高く、遺構が集中している。北区では灰褐色粘質土の上面で溝が検出され、更に下層の褐色砂質土、褐色砂層の上面で竪穴住居跡等を検出した。中区は、盛土層を除去すると暗褐色砂層に達し、南区は黄褐色砂質土の上面が遺構面で、一部礫層が露出する。黄褐色砂質土の下層は中区で検出した暗褐色砂である。本来の地形は、微高地上にあたる北区から南区へと緩やかに傾斜していたが中区が削平されたか、あるいは北区と中区を限る作業用道路の下あたりで地形が傾斜し、中区、南区とも浅い谷状地形にあたると思われる。

検出遺構は、竪穴住居跡 7 軒、土坑 3 基、竪穴状遺構 2 基、溝 5 条、ピットである。遺構番号は全区通しで付している。

II 遺構と遺物

竪穴住居跡

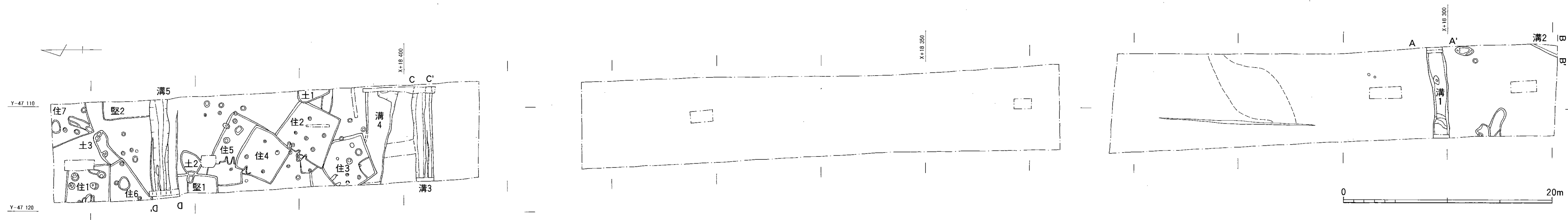
1号竪穴住居跡（図版2、第4図）

北区北端に位置し、6号住居跡、3号土坑より新しい。

西壁は調査区外、北東隅は試掘トレンチにかかっているが完存する住居壁はないが、およそ 4m 四方の規模の住居跡である。

柱間距離は P1-P2 が 1.3m、P3-P4 間が 1.2m、P1-P3 が 2.2m、P2-P4 間が 2.6m で、P1-P3、P2-P4 の柱通りはほぼ南北だが、P1-P2 は 40°、P3-P4 は 22° 北にふれている。本住居跡周辺は砂質土で住居跡の検出は難しかったが、柱痕は粘質土が詰まっており比較的検出は容易であった。ほぼ東西に軸が通るものとして検出、掘削したが、本来住居跡自体の軸も北にふれると思われる。

住居の床に硬化面は認められず、カマドの脇の小ピットと柱痕のほかに床面施設は検出できなかった。西壁にカマドを付している。



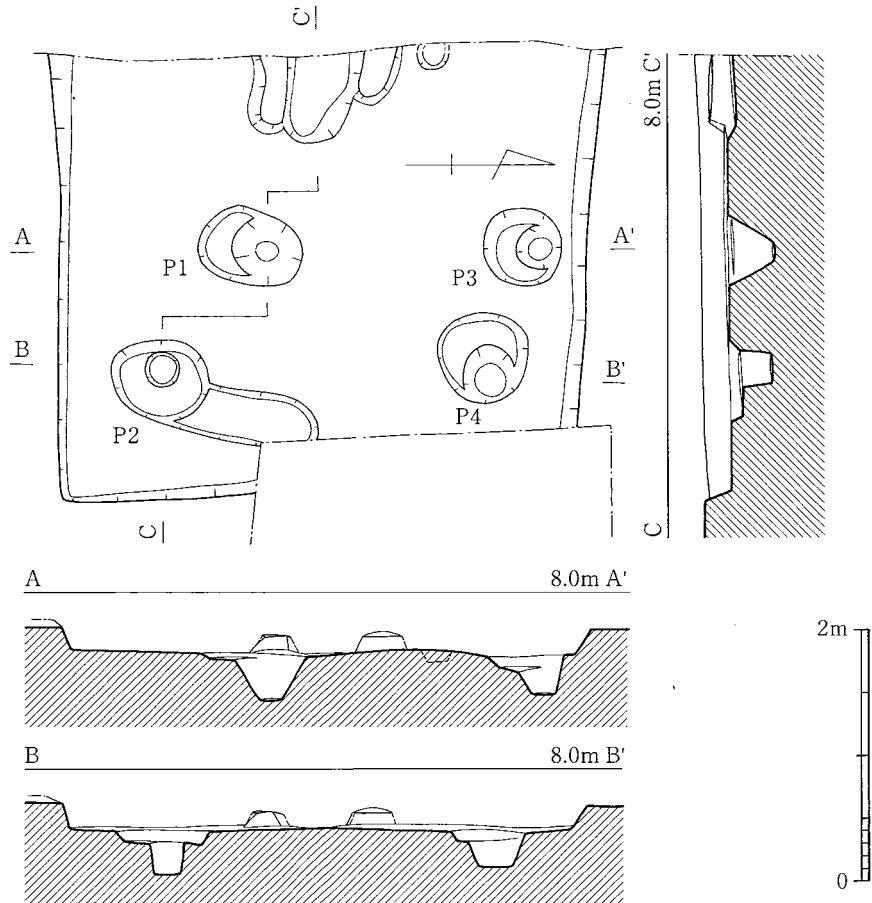
第3図 遺構配置図(1/300)

カマド

(図版2、第5図)

住居跡西壁に作りつけられている。住居跡西壁が調査区外になるため、西壁より突出するかどうかや、煙道の状況は不明である。袖間の距離は55cmである。

カマド周辺とその内部には、炭化物を含む暗褐色粘質土や褐色砂質土が堆積していたが、カマドの袖や床面に顕著な焼け面は認められなかった。また、支脚や袖石、その痕跡も検出できておらず、その形態には疑問が残る。



第4図 1号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物 (図版8、第6図)

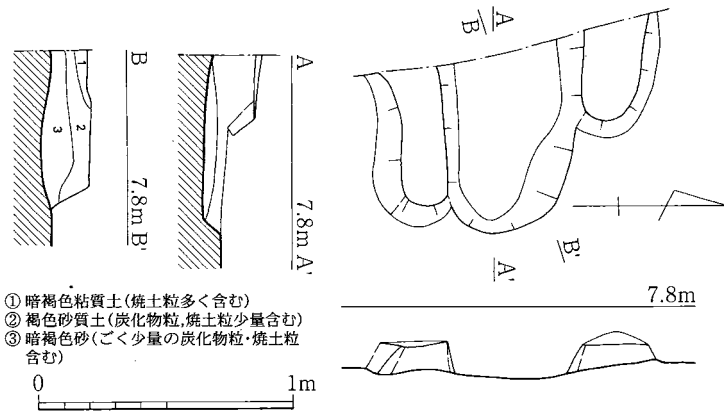
1は弥生土器で甕の口縁部片である。口縁部外面はハケメ後ヨコナデ調整、口縁部内面、体部内外面はハケメ調整である。復元口径19.8cm。混入品である。

2~5は土師器である。2は坏。内面の一部にかろうじてヨコナデの痕跡が残るのみで、摩滅著しく調整不明。復元口径12.6cm。

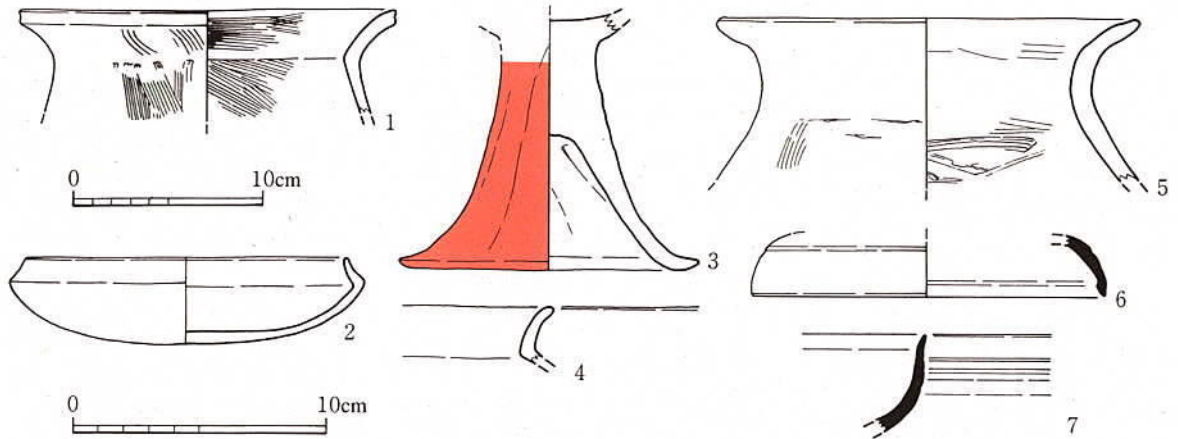
3は高坏の脚部である。外面に面取り、内面にヘラ削りの痕跡が残るが、摩滅して最終的な調整は不明である。外面に丹塗りを施す。脚部径11.8cm。

4は甕の口縁部小片。体部内面をヘラ削りするほかは、摩滅著しく調整不明。5も甕の口縁部である。口縁部外面は摩滅して調整不明、内面はハケメ後ヨコナデ調整。体部外面は粗いハケメ調整、内面は粗く雑なハケメ調整である。復元口径16.4cm。

6・7は須恵器である。6は坏蓋の口縁部。口縁端部をつまむように薄く仕上げる。内外面ともヨコナデである。復元口径14.0cm。7は高坏の坏部小片である。口縁下に2条の沈線を巡らせる。内外面ともヨコナデ。外面は全面に灰を被っている。



第5図 1号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



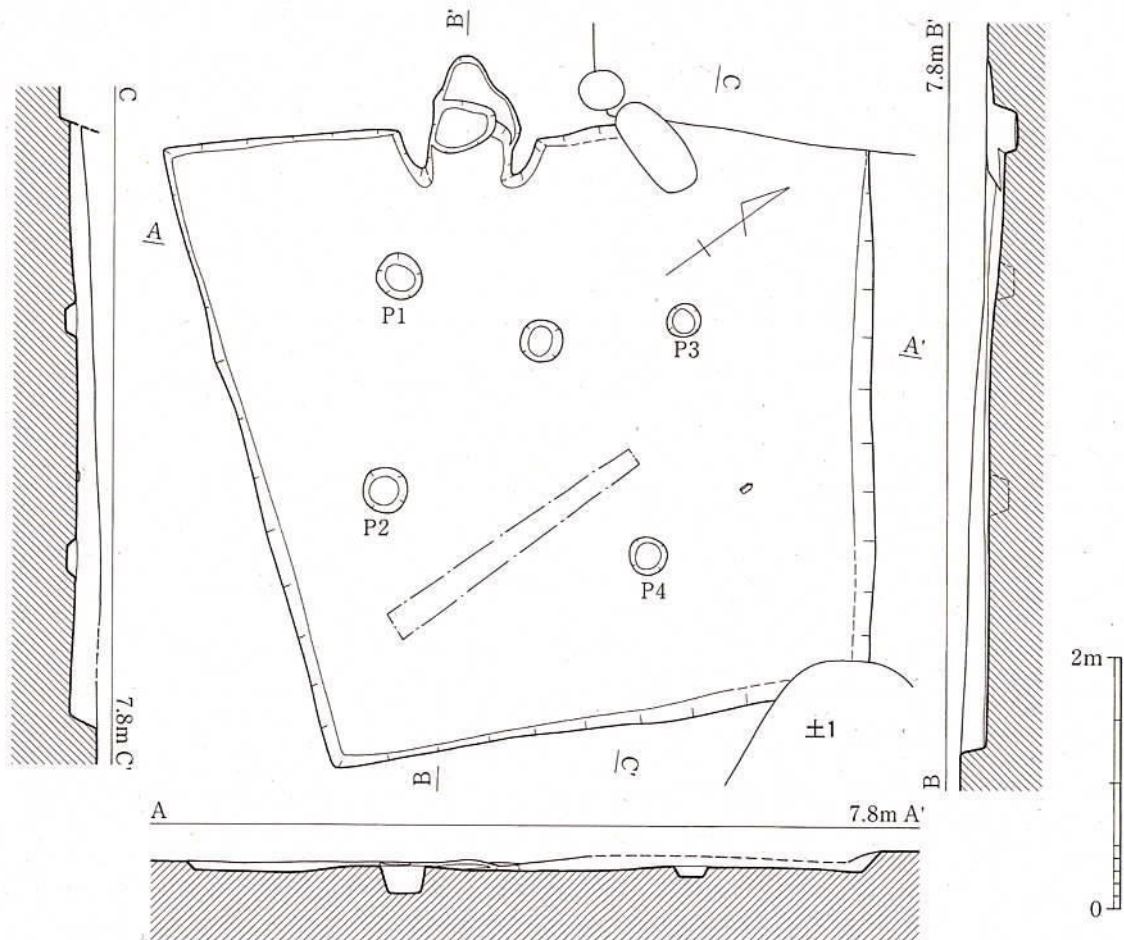
第6図 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3・1/4)

2号竪穴住居跡 (図版2、第7図)

北区ほぼ中央に位置し、4号住居跡、1号土坑より古く、3号住居跡より新しい。

住居跡の検出が難しく平面形が歪んでいるが、本来はほぼ正方形の平面形をもつと思われる。

柱間距離はP1-P2が1.7m、P3-P4が1.85m、P1-P3が2.3m、P2-P4が2.15mである。柱の主軸はP1-P3で北に40°、P2-P4で北に44°ふれている。おそらく、北壁がほぼ正しく検出できており、本来住居跡の軸も同様に北にふれるであろう。



第7図 2号竪穴住居跡実測図(1/60)

床面に硬化面は認められなかった。また、ピットと柱跡のほかには床面施設を検出できなかった。西壁にカマドを付している。

土器のほか磨石(図版9、第31図)が出土している。

カマド(図版3、第8図)

住居跡西壁を60cmほど掘り込んでカマドを構築している。袖間の距離は60cmである。

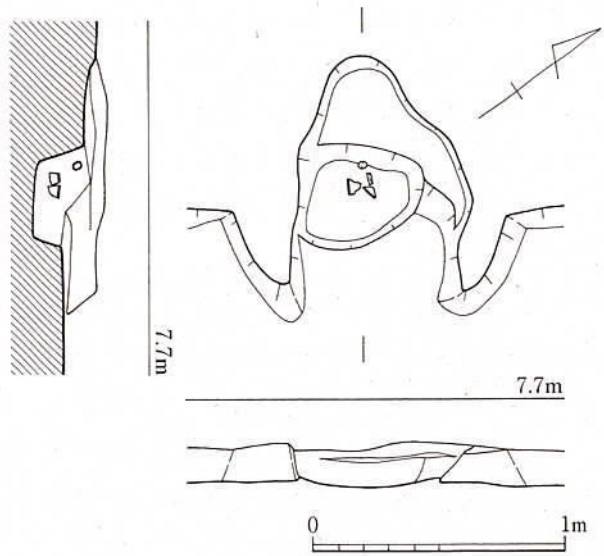
カマド周辺とその内部には炭化物や焼土粒を含む淡褐色砂質土が堆積していたが、カマドの袖や床面に顕著な焼け面は認められなかった。

カマドの床面は10cmほど掘りすぎており、土器片の直下が本来の床面であろう。支脚、袖石等は認められず、その痕跡も検出できなかった。

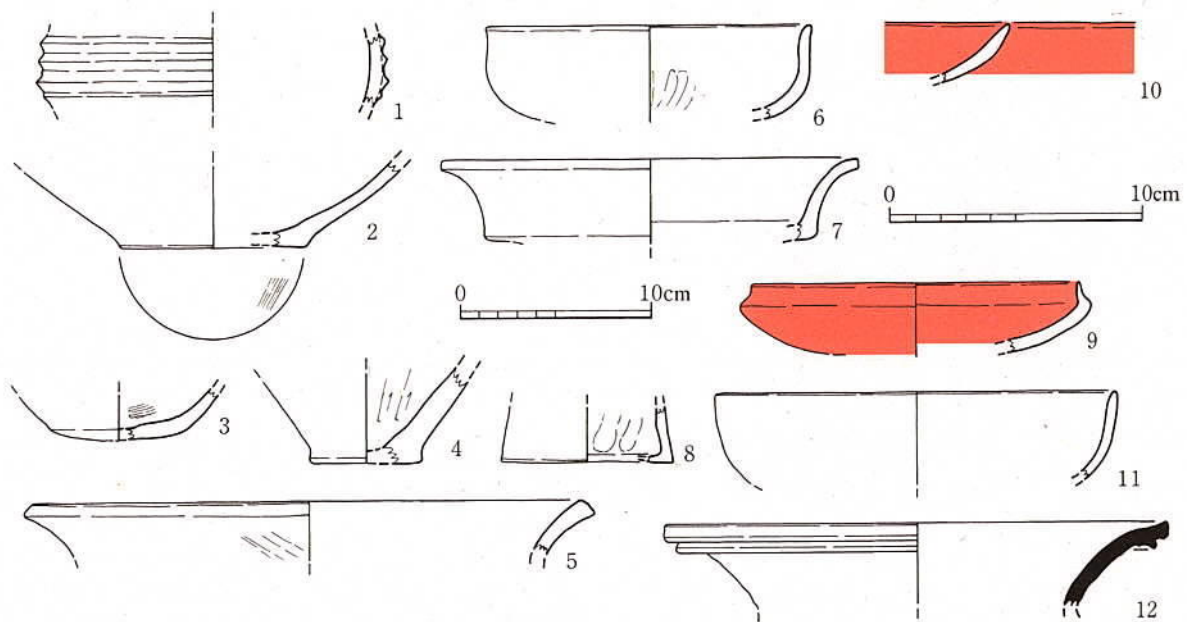
出土遺物(第9図)

1~8は弥生土器で混入品である。1は壺の体部片。体部の最も張っている部分で、断面三角形の4条の突帯を巡らせる。内面は摩滅してわかりにくい、ヨコナデ調整であろう。復元体部径18.0cm。2・3は底部片である。2は底部外面がハケメ調整であるほかは、内外面とも摩滅著しく調整不明。復元底径9.9cm。3は、外面は摩滅著しく調整不明、内面は中心部近くを指オサエし、体部に向かってハケメ後ナデ調整する。外面に黒斑がある。復元底径7.4cm。

4は甕の底部片である。外面は摩滅著しく調整不明。内面は、底部付近はユビナデ、体部は摩滅してわかりにくい、ハケメあるいはヘラ状工具による擦過である。復元底径5.8cm。



第8図 2号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



第9図 2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3・1/4)

5は甕の口縁部片で、端部を厚めに角張って仕上げる。外面に僅かにハケメが残るほかは摩滅著しく調整不明。復元口径 39.2 cm。6は椀か高杯の坏部になろう。内面の底部付近をユビナデするほかは、摩滅して調整不明。復元口径 16.8 cm。7は坏部、脚部とも有段状を呈する高杯。内面の一部にヨコナデ調整がみとめられるほかは、摩滅著しく調整不明。復元口径 21.7 cm。8はジョッキ型土器であろう。外面は摩滅して調整不明、内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。復元底径 9.0 cm。

9～11は土師器である。9は模倣坏である。底部外面を手持ちヘラ削り、内面をミガキ調整するが、摩滅して単位は不明。内外面とも丹塗りを施す。復元口径 13.0 cm。10は口縁部小片。内外面とも丹塗りを施すが、摩滅著しく調整不明。11は椀である。内外面とも摩滅著しく調整不明。化粧土を施した痕跡が残る。復元口径 15.8 cm。

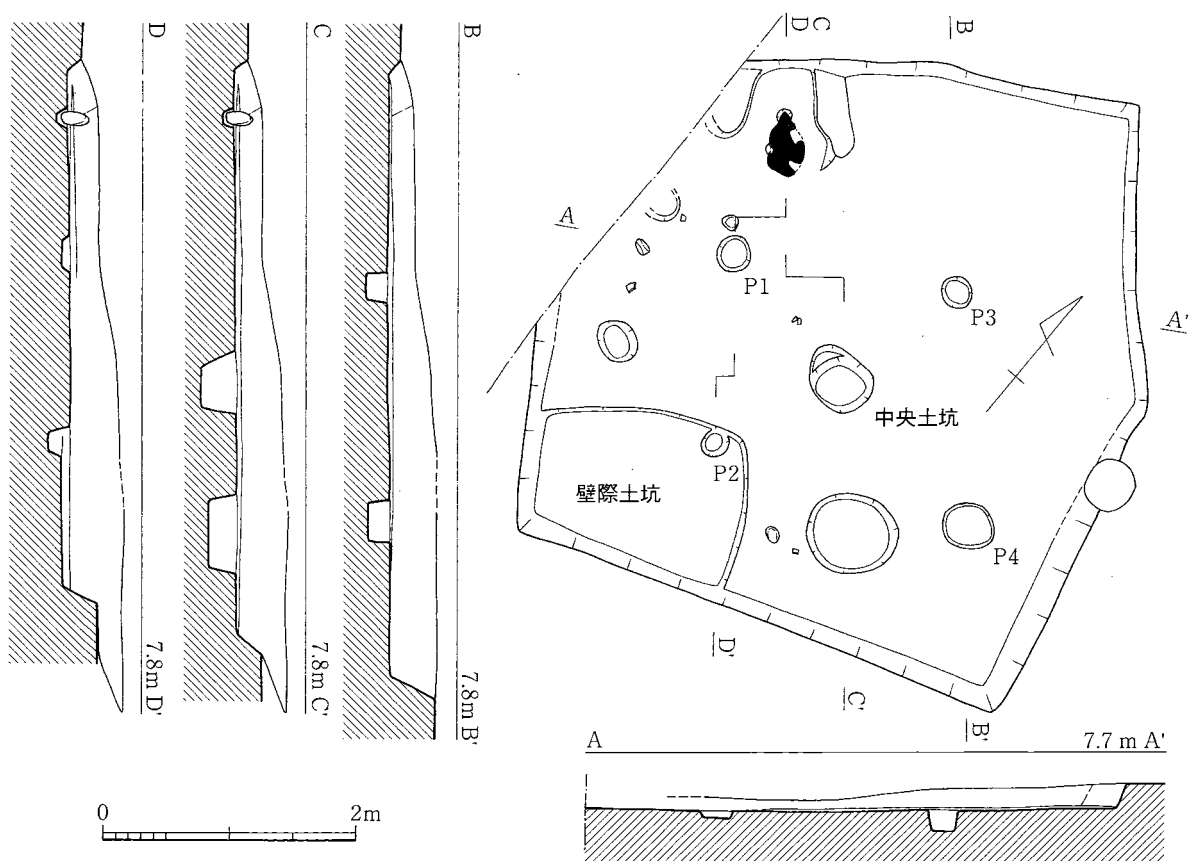
12は須恵器で甕の口縁部片である。内外面ともヨコナデ。復元口径 19.9 cm。

3号竪穴住居跡（図版3、第10図）

北区南よりに位置し、2号住居跡、4号溝より古い。

2号住居跡の床面で検出した北隅と、カマドが取り付く北西壁はほぼ正しく検出できたが、他の部分は正しく検出できず歪んでいる。

柱間距離はP1-P2が1.5m、P3-P4が1.9m、P1-P3が1.8m、P2-P4が2.1mである。P1とP3を結ぶ線が北西壁と、P3とP4を結ぶ線が北東壁と平行になるので柱跡と判断したが、P1だけが浅いのが気になる。住居跡の主軸は北に50°ふれている。



第10図 3号竪穴住居跡実測図(1/60)

床面に特に硬化した部分は認められなかった。中央土坑、壁際土坑を検出したところで掘削を中止したが、カマドの床面とほぼ同じ高さであり、それほど掘りすぎではないと思われる。

中央土坑は長さ 56 cm、幅 44 cm の楕円形で、深さは 28 cm である。南側の壁が、土坑床面から 5~12 cm、幅 30 cm にわたり硬く焼け締まっている。継続的に熱が加えられたようだが、土坑床面には熱を受けた痕跡は認められなかった。壁際土坑はごく浅いもので、7 cm ほどの深さしかない。

土器のほかに磨石（図版 9、第 30・31 図）が出土している。

カマド（図版 3・4、第 11 図）

本遺跡中で最も残存状況がよいカマドである。住居跡の北西壁に作りつけられている。支脚と焼け面が残っているが、カマド本体はかろうじて袖の範囲が判別できる程度にまで破壊されている。支脚と奥壁の間と、焼け面の上面に土器片が集中するが、いずれもカマド本体を破壊後に置かれたもので祭祀的な意味をもつと思われる。土師器坏（第 12 図 7）が出土した。

袖間の距離は 55 cm である。カマド奥壁から支脚中心までの距離は 40 cm、支脚中心から焼け面中心までの距離は 25 cm を測る。

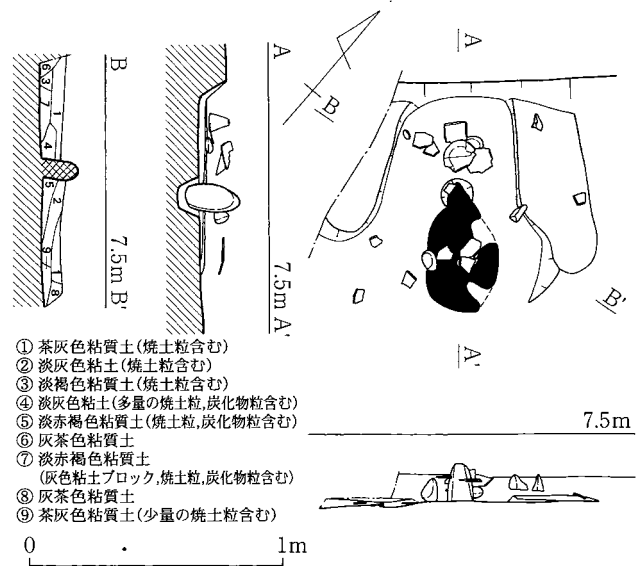
出土遺物（図版 8、第 12 図）

1~5 は弥生土器で混入品である。1 は広口壺の口縁から肩部にかけての破片。外面の調整は、口縁部はハケメ後ヨコナデ、頸部はハケメ、頸部から肩部にかけてはハケメ後ヨコナデ調整し、2 条の沈線を巡らせる。内面は、口縁部から頸部にかけてハケメ後ヨコナデ調整、頸部と肩部の継ぎ目部分をユビナデする。復元口径 19.2 cm。

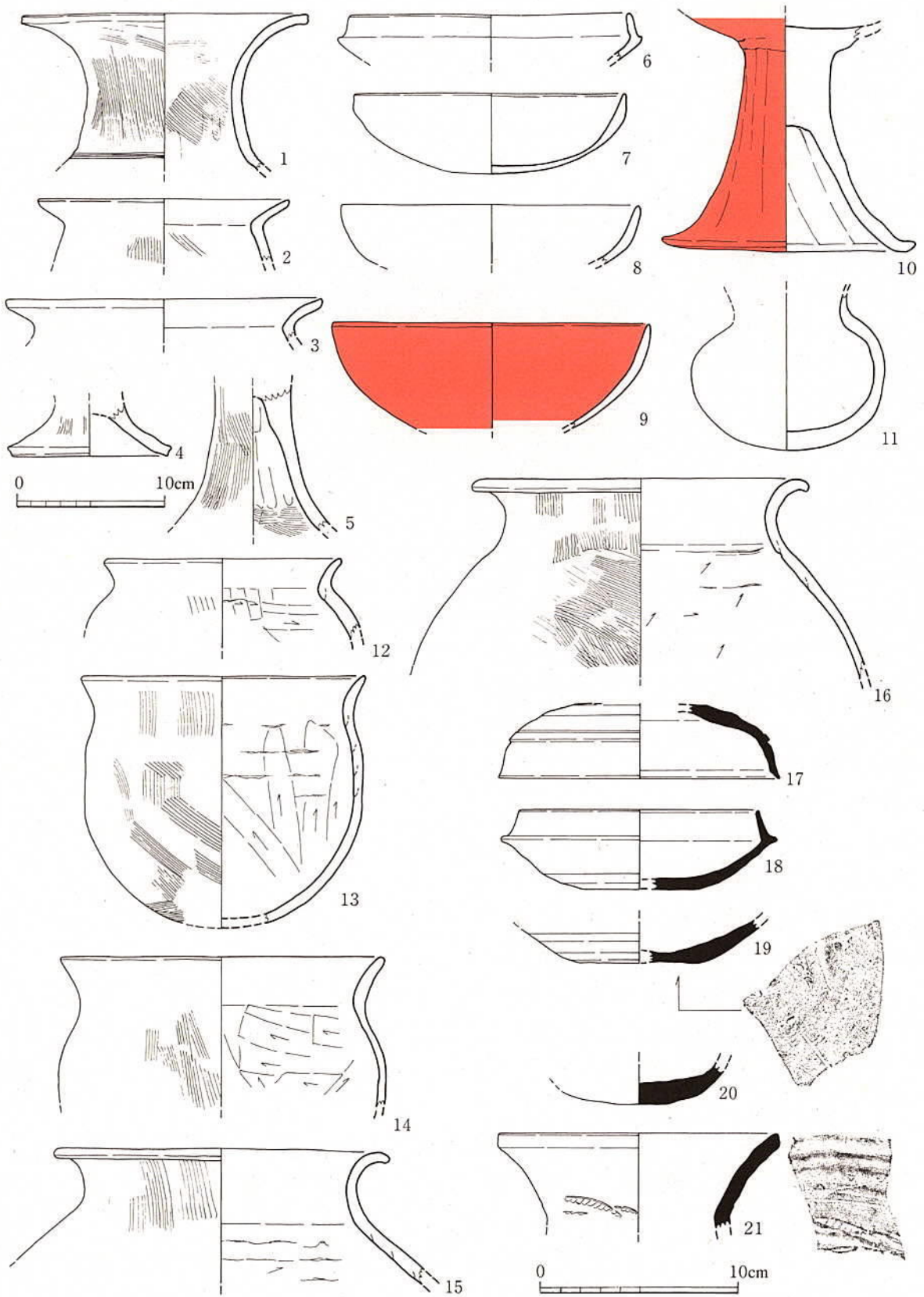
2・3 は甕の口縁部片。2 の口縁部は内外面とも摩滅著しく調整不明、体部内外面はハケメ調整である。復元口径 16.4 cm。3 は口縁端部を上方につまみ出すように仕上げる。内外面とも摩滅著しく調整不明。復元口径 21.3 cm。

4 は脚部が低い高坏、あるいは台付き鉢の脚部である。脚端部はつまみ出し気味に角張って仕上げる。外面にハケメが僅かに残るほかは摩滅著しく調整不明。復元脚端部径 10.4 cm。5 は高坏の脚部で外面はハケメ調整する。内面はナデ調整し、脚端部付近をハケメ調整する。

6~16 は土師器である。6 は模倣坏で、体部内面はヨコナデ、他は摩滅著しく調整不明。復元口径 15.0 cm。7~9 は椀である。7 は口縁部が厚く、体部、底部は薄い。底部外面を手持ちヘラ削りすると思われるが、摩滅著しく調整不明。復元口径 13.6 cm、器高 4.1 cm。8 は体部内面をミガキ調整するが摩滅して単位は不明。ほかの部分は摩滅著しく調整不明。復元口径 14.8 cm。9 は内外面とも丹塗りを施すが、摩滅著しく調整は不明。復元口径 15.8 cm。



第11図 3号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



第12图 3号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3·1/4)

10 は高坏である。坏部の底部は摩滅著しく調整不明。脚部外面は摩滅著しいが面取りの痕跡と、一部に丹が残る。脚部内面はヘラ削りする。脚部径 12.8 cm。

11 は小型丸底壺で、口縁部を欠失している。底部内面を指オサエするほかは、摩滅著しく調整不明である。

12～16 は甕である。12 は口縁部が短く、胴が張る。口縁部は内外面とも摩滅著しく調整不明。体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削りである。口縁部内面が黒変している。復元口径 11.8 cm。13・14 はともに口縁部の屈曲が緩く、胴の張りが弱い。13 の外面は口縁部から底部までハケメ調整、内面は口縁部が摩滅、体部がヘラ削りである。粘土紐の継ぎ目がわかる粗雑なつくりである。復元口径 14.5 cm、復元器高 12.7 cm、復元最大体部径 14.0 cm。14 の口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削りである。復元口径 16.0 cm。

15・16 は口縁端部が強く外反し、粘土紐の継ぎ目がわかる。15 は全体に摩滅気味であるが、口縁部外面はハケメ調整、体部内面はヘラ削りである。復元口径 17.0 cm。16 は外面をハケメ調整するが、体部を調整後に口縁部を調整している。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はヘラ削りする。復元口径 16.0 cm。

17～21 は須恵器である。17 は蓋で、天井部と体部の境に段を有し、口縁端部をつまむように薄くつくる。内面は摩滅著しく調整不明、天井部外面は回転ヘラ削り、体部から口縁部はヨコナデである。復元口径 14.2 cm。18 は坏身である。底部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデ調整、ほかはヨコナデである。復元口径 12.0 cm、器高 4.0 cm。17 の蓋と対になると思われる。19 は坏身の底部片である。外面は体部から底部にかけて回転ヘラ削り、底部内面はナデ調整、体部内面はヨコナデ。外面にヘラ記号がある。20 は小型の壺の底部片である。内面はヨコナデ、外面は灰を被って調整不明である。21 は壺の口縁部片であろう。内外面ともヨコナデで、頸部に櫛目文を施す。復元口径 14.0 cm。

4号竪穴住居跡（図版4、第13図）

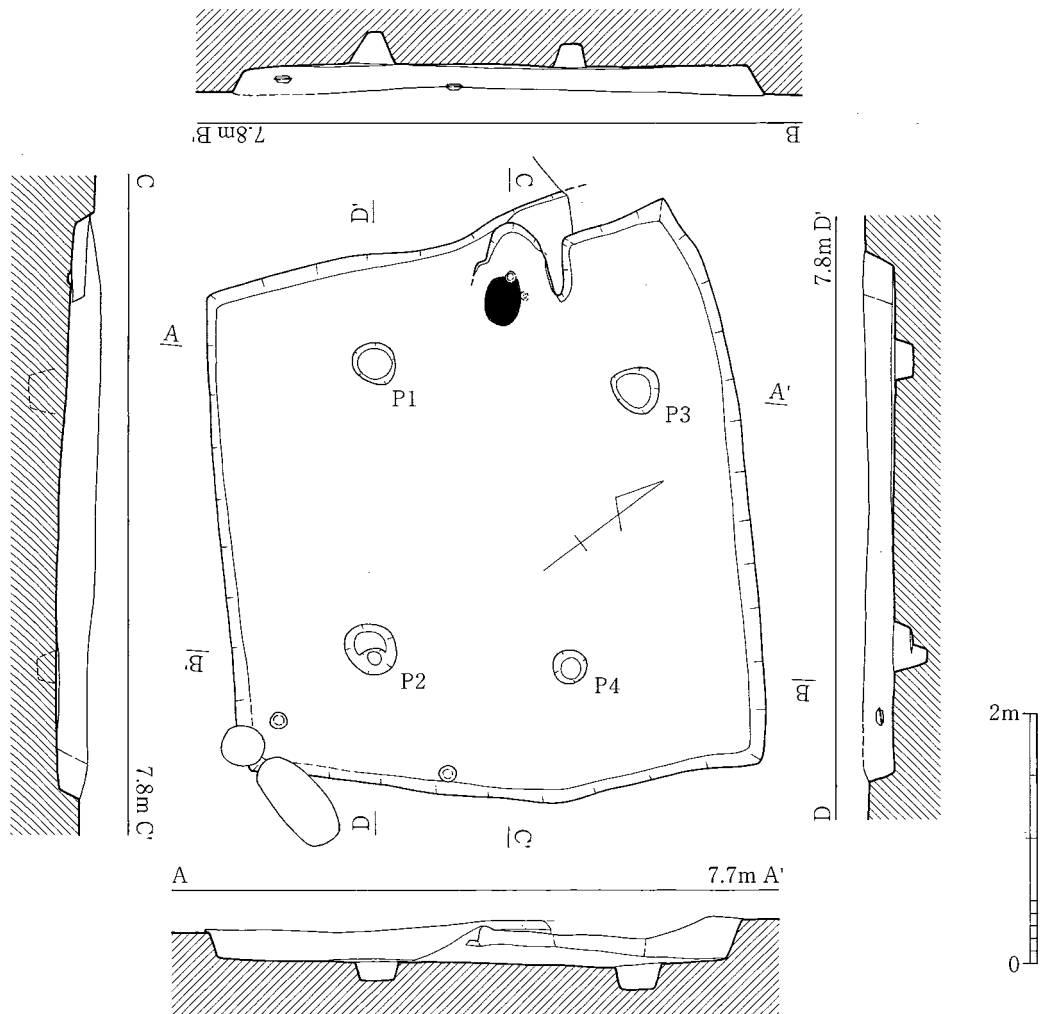
北区ほぼ中央に位置し、2号住居跡、5号住居跡より新しい。北西隅を正しく検出できなかったようで歪んでいるが、ほぼ正方形の平面形を呈し、南壁 3.8m、東壁 4.0mを測る。主軸は北に約 37° ふれている。

柱間距離は P1-P2 が 2.35m、P3-P4 が 2.3m、P1-P3 が 2.1m、P2-P4 が 1.55mである。P2-P4 間が極端に狭い点が気になるが、柱通りは P1-P3 とほぼ平行である。住居跡外に痕跡を検出できなかったが、支柱が用いられた可能性が考えられる。

柱跡をなかなか検出できず、床面を掘り下げすぎている。カマドの焼け面から考えて 7.4m 前後が本来の床面であろう。特に硬化面は認められず、柱跡以外の床面施設も検出できなかった。西壁にカマドを付している。

東壁際と南東隅で、ほぼ完形の須恵器坏身（第 15 図 10）と土師器杯身（1）が伏せた状態で出土した。どちらも床面からは浮いており、住居が埋没する過程で意図的に置かれたと思われる。カマド（図版 4、第 14 図）

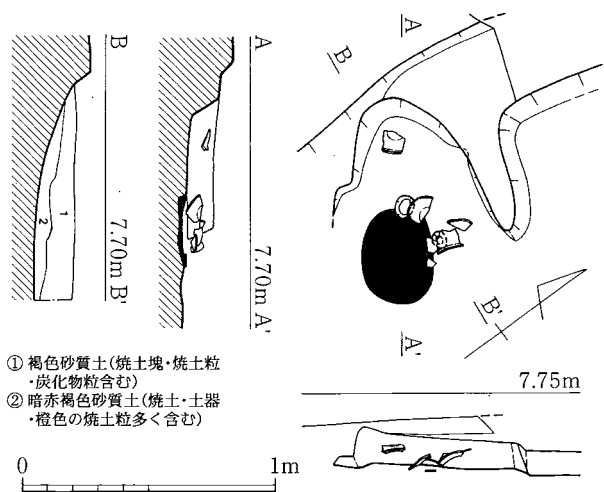
住居跡西壁を掘り込んで構築している。西壁を正しく検出できていないので現況では 20 cm の掘り込みだが、本来は西壁に対して 40 cm 程度掘り込んでいたと思われる。



第13図 4号竪穴住居跡実測図(1/60)

住居跡掘削時にカマドの存在に気づかず、左袖を破壊してしまった。残存状況がよいカマドだけに残念である。袖間距離は60cm程度に復元できる。支脚痕と床面に焼け面が残っているが、袖には焼け面は残っていない。

焼け面と右袖の間に支脚痕より一回り小さいピットを検出した。支脚の補助に石等を据えた痕であろう。カマド内部の土器は支脚を抜いた後に置かれたものと思われ、祭祀的な意味をもつと思われる。土師器坏(第15図2)、土師器甕(6)須恵器坏(12)が出土した。



- ① 褐色砂質土(焼土塊・焼土粒・炭化物粒含む)
- ② 暗赤褐色砂質土(焼土・土器・橙色の焼土粒多く含む)

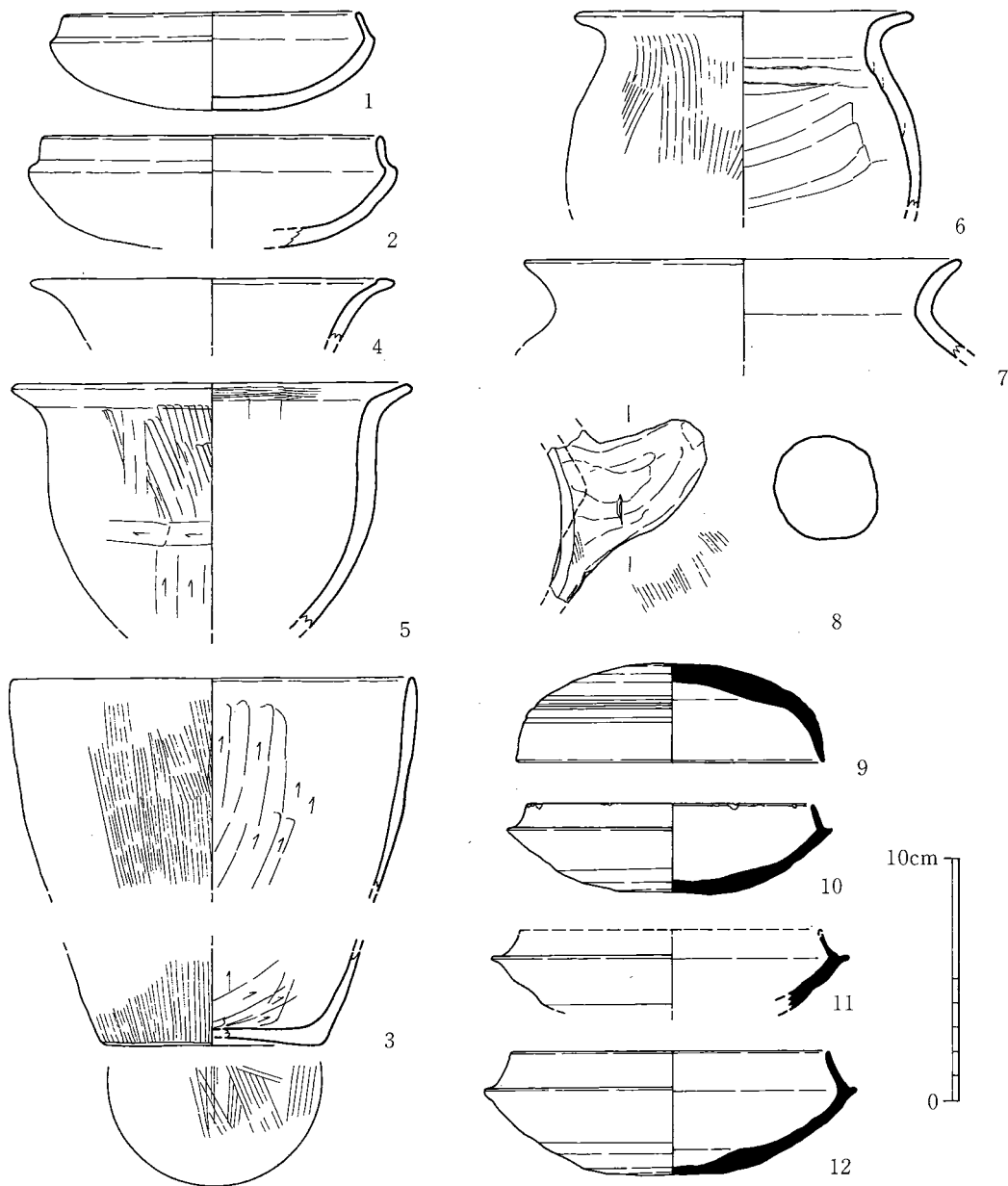
第14図 4号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

奥壁から支脚痕中心までの距離は35cm、支脚痕中心から焼け面中心までの距離は23cmを測る。出土土器(図版8、第15図)

1~8は土師器である。1・2は模倣坏。摩滅が著しく、内面の一部にヨコナデが、底部外面に

手持ちヘラ削りの痕跡が残るほかは調整不明。復元口径 12.0 cm、器高 4.0 cm。2 は内外面とも摩滅著しく調整不明。復元口径 13.5 cm。3 は体部が直線的にのびる鉢である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部、底部とも外面はハケメ調整、内面はヘラ削りである。被熱のため赤変している。復元口径 16.4 cm、復元底径 8.4 cm。

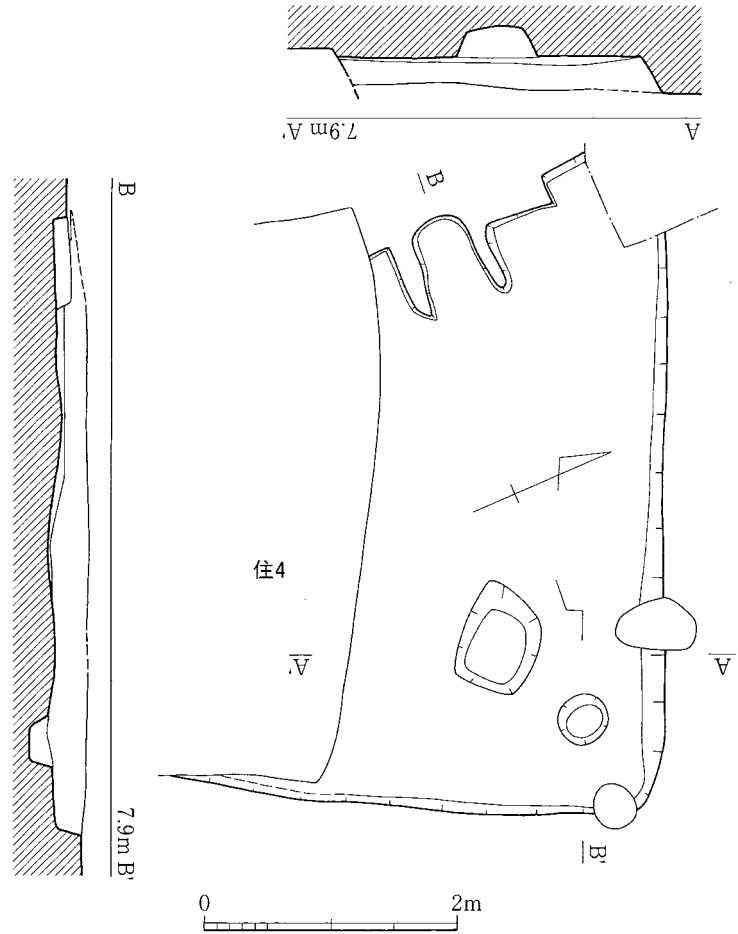
4 は甕の口縁部片で、口縁端部をつまみだすように仕上げる。内外面とも摩滅著しく調整不明。5 は口縁部が短く外反する甕である。口縁部外面はヨコナデ調整、内面はハケメ調整。体部外面は上半を粗いハケメ調整後下半をヘラ削りし、内面はヘラ削り後ナデ調整する。復元口径 16.0 cm。6 は口縁部が強く外反し、体部がやや張る。口縁部は内外面とも摩滅、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削りである。粘土紐の継ぎ目がわかる粗雑な作りである。復元口径 13.4 cm。7 は口縁部が直線的にのびる。体部内面をヘラ削りするほかは摩滅著しく調整不明。復元口径 17.9 cm。



第15図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

8は甌の把手部である。把手外面はナデ調整、体部外面はハケメ調整、内面は下から上へヘラ削りする。

9~12は須恵器である。9は坏蓋で天井部と体部の境に螺旋状に沈線を巡らせる。口縁端部はつまむように薄く仕上げる。口縁部内外面は摩滅、天井部外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデ。復元口径12.4 cm、器高4.1 cm。10はほぼ完形の坏身で、口縁部を打ち欠いている。底部外面を回転ヘラ削りするほかはヨコナデである。口径11.6 cm、器高3.6 cm。11は口縁端部を欠く。天井部外面は回転ヘラ削り、ほかはヨコナデである。12は全体に摩滅していて、天井部外面の回転ヘラ削りのほかは調整不明。口径12.8 cm、器高5.0 cm。



第16図 5号竪穴住居跡実測図(1/60)

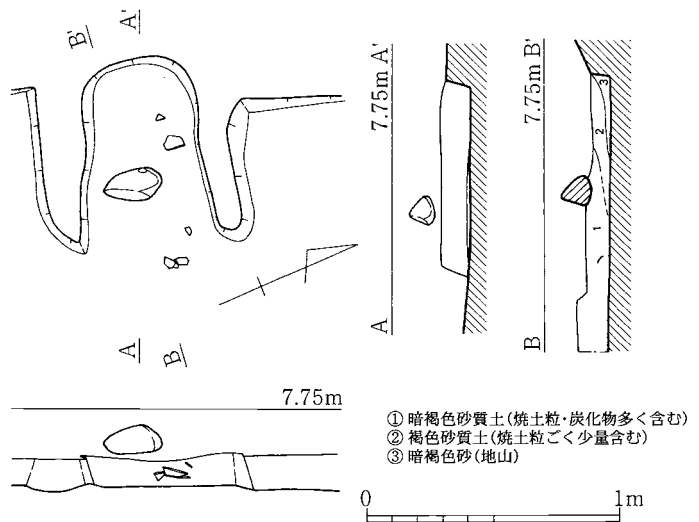
5号竪穴住居跡 (図版5、第16図)

北区ほぼ中央に位置し、4号住居跡より古い。完存している壁がなく、正確な住居跡の規模は不明だが、4号住居跡とごく近い規模で平面形はほぼ正方形であろう。主軸も4号住居跡と同様約40°北にふれる。

明確に柱跡と認められるピットが検出できず、柱位置は不明である。床面に特に硬化した部分は認められない。西壁にカマドを付している。

カマド (図版5、第17図)

西壁を15 cm掘り込んで構築している。袖間の距離は45 cmである。カマド内部に焼土粒や炭化物を多く含む暗褐色砂質土が堆積していたが、支脚痕や顕著な焼け面は検出できておらず、その形態にはやや疑問が残る。



第17図 5号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

両袖の中間で長さ 20 cm 程度の石材が出土したが、支脚痕は検出できていないため、これが支脚であったかどうかは不明である。カマド廃棄後に意図的に置かれた可能性もある。

土師器碗（第 18 図 2）がカマド内から出土した。

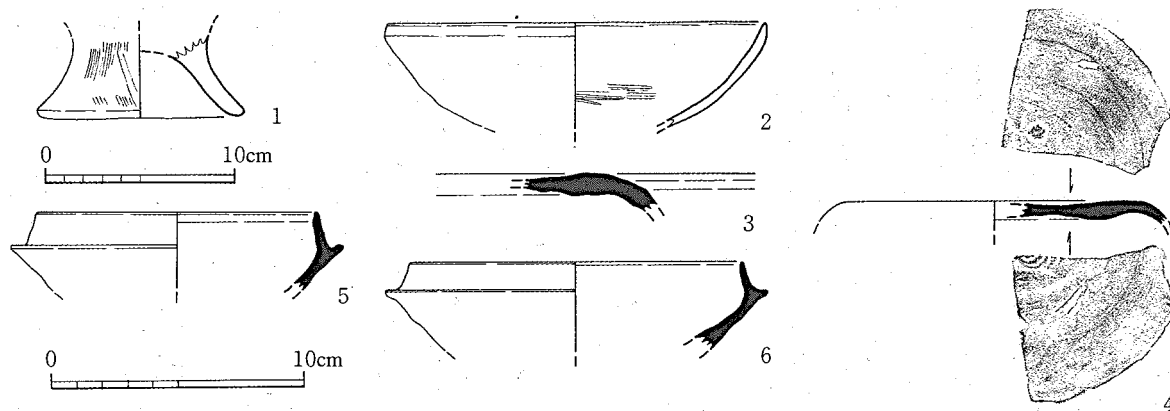
出土遺物（第 18 図）

1 は弥生土器で混入品である。甕の底部片で、脚状を呈する。内面はヨコナデ調整、外面はハケメ後ヨコナデ調整。復元底径 10.2 cm。

2 は土師器碗で、口縁部を直立気味に仕上げる。内面のごく一部にミガキ調整が残るが、ほかは摩滅著しく調整不明。復元口径 14.8 cm。

3～6 は須恵器である。3 は蓋の小片で、天井部から体部への屈曲がつよい。外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデ。4 も体部の屈曲が強い蓋である。天井部外面は回転ヘラ削り、体部外面はヨコナデで、ヘラ記号らしきものがある。内面はヨコナデで、天井部中心付近に同心円文の当て具痕が残る。

5・6 はともに坏身で、内外面ともヨコナデである。復元口径は 5 が 11.0 cm、6 が 13.0 cm。



第18図 5号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3・1/4)

6号竪穴住居跡（図版5、第19図）

北区北端付近に位置し、1号住居跡、5号溝より古く、3号土坑より新しい。その半分程度が調査区外にあたり、1号住居跡に切られてもいるので、正確な規模、平面形は不明である。南東壁の現存する部分で 4.4m を測る。主軸は西に 33° ふれる。

床面に特に硬化した部分は認められなかった。また、明確に柱跡と認められるピットや炉跡も検出できていない。

出土遺物（第 21 図）

1～4 は弥生土器の甕である。1 は底部小片で、体部外面はハケメ調整後、底部近くをヨコナデ調整する。底部外面はハケメ調整、内面は摩滅著しく調整不明である。2 は口縁部片で、端部をつまみ上げるように仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部は内外面ともハケメ調整である。復元口径 13.3 cm。3 は口縁部小片である。端部は角張って仕上げる。外面は摩滅しているが、内面はハケメ調整である。4 は大型の甕の口縁部片である。端部は断面三角形形状につまみ上げるように仕上げ、刻み目と「X」字状の線刻を施す。口縁部は内外面ともハケメ調整、体部内面はナデ調整である。復元口径 50.0 cm である。

7号竪穴住居跡 (図版6、第20図)

北区北東隅に位置する。調査区外にのびるので、正確な規模、平面形は不明である。現存部分で西壁は4.3m、南壁は2.9mを測る。主軸は西に20°ふれる。

床面に特に硬化した部分は認められず、明確に柱跡と認められるピットも検出できていない。

出土遺物 (図版9、第21図)

5~9は弥生土器である。5は丸底気味の短頸壺である。口縁部外面はヨコナデ調整、体部、底部外面はハケメ調整、内面は摩滅して調整不明。復元口径12.8cm、器高14.0cm、復元最大体部径18.2cm、底径5.0cm。

6は口縁部が短く外反する鉢である。内外面とも摩滅著しく調整不明。復元口径17.8cm。

7は完形の坏。内外面ともハケメ調整の後、口縁部をヨコナデ調整、底部外面をナデ調整。口径10.7cm、器高5.5cm。

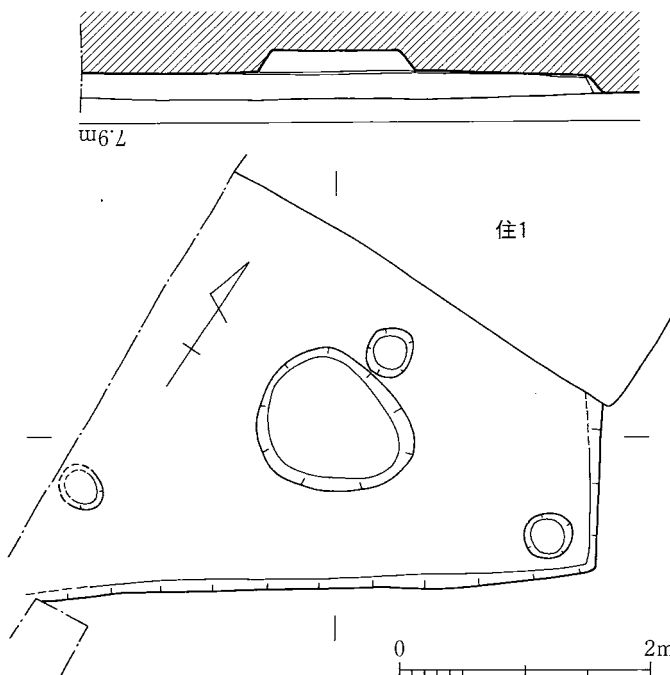
8・9は器台である。8は口縁部内外面をヨコナデ調整、外面をハケメ調整、内面はナデ調整する。復元口径10.6cm。9は脚部片。摩滅しているが、外面にわずかにハケメが認められる。内面はヘラ状の工具による擦過あるいは削りの痕跡が残る。脚部径12.0cm。

竪穴状遺構

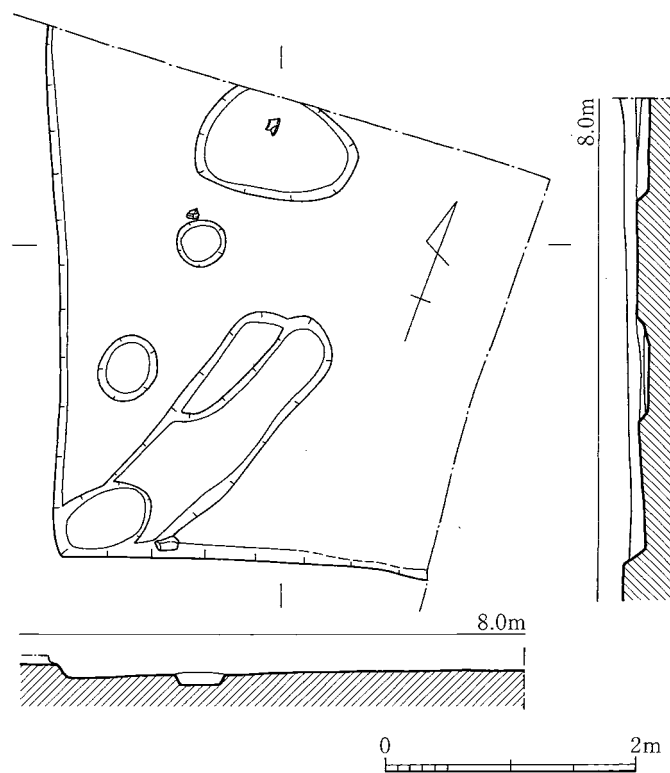
1号竪穴状遺構 (図版6、第22図)

北区北寄りに位置し、5号溝より古い。調査区外にのび、正確な規模、平面形は不明である。南壁の現存部分1.5m、深さ0.3mを測る。

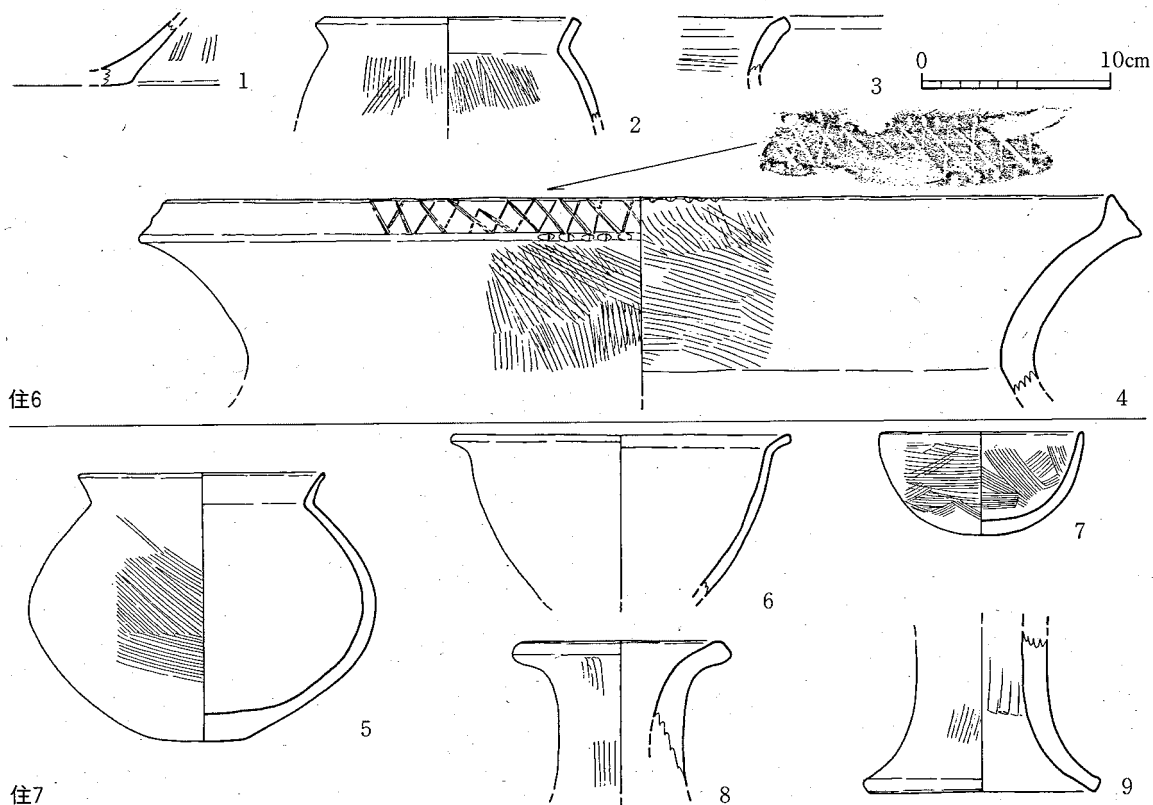
検出時には竪穴住居跡かと思われたが、床面になんの施設も検出されていない。また、検出時には2号土坑との新旧関係が判らなかったが、出土土器から2号土坑より1号竪穴状遺構の方が新しい。



第19図 6号竪穴住居跡実測図(1/60)



第20図 7号竪穴住居跡実測図(1/60)



第21図 6・7号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土遺物 (第23図)

1~4は弥生土器である。1は鉢で、口縁部は内外面とも摩滅、体部は内外面ともハケメ調整である。2・3は甕の口縁部片で、端部を角張って仕上げる。2の口縁部内面はヨコナデ調整、外面はハケメ調整後ヨコナデ調整、体部内面は摩滅のため調整不明。復元口径 26.7 cm。3の口縁部内外面は摩滅著しく調整不明、体部内面はハケメ調整である。復元口径 27.8 cm。

4はコップ形土器の底部片。外面は全体に摩滅して調整不明だが、ヘラ状工具でなで上げたような痕が残る。内面は指オサエとナデ調整。復元底径 4.0 cm。

5・6は土師器の甕である。5は、口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面は摩滅、内面はヘラ削りである。復元口径 15.3 cm。6は口縁部の屈曲が強く、端部はくぼませ気味に仕上げる。内外面とも摩滅著しく調整不明。復元口径 22.6 cm。

2号竪穴状遺構 (図版7、第22図)

北区北寄りに位置し、5号溝より古い。大部分が調査区外にのび、正確な規模、平面形は不明である。西壁の現存部分 4.4m、深さ 0.15mを測る。

検出時には竪穴住居跡かと思われたが、床面になんの施設も検出されなかった。弥生土器が出土したが、小片で図示できない。

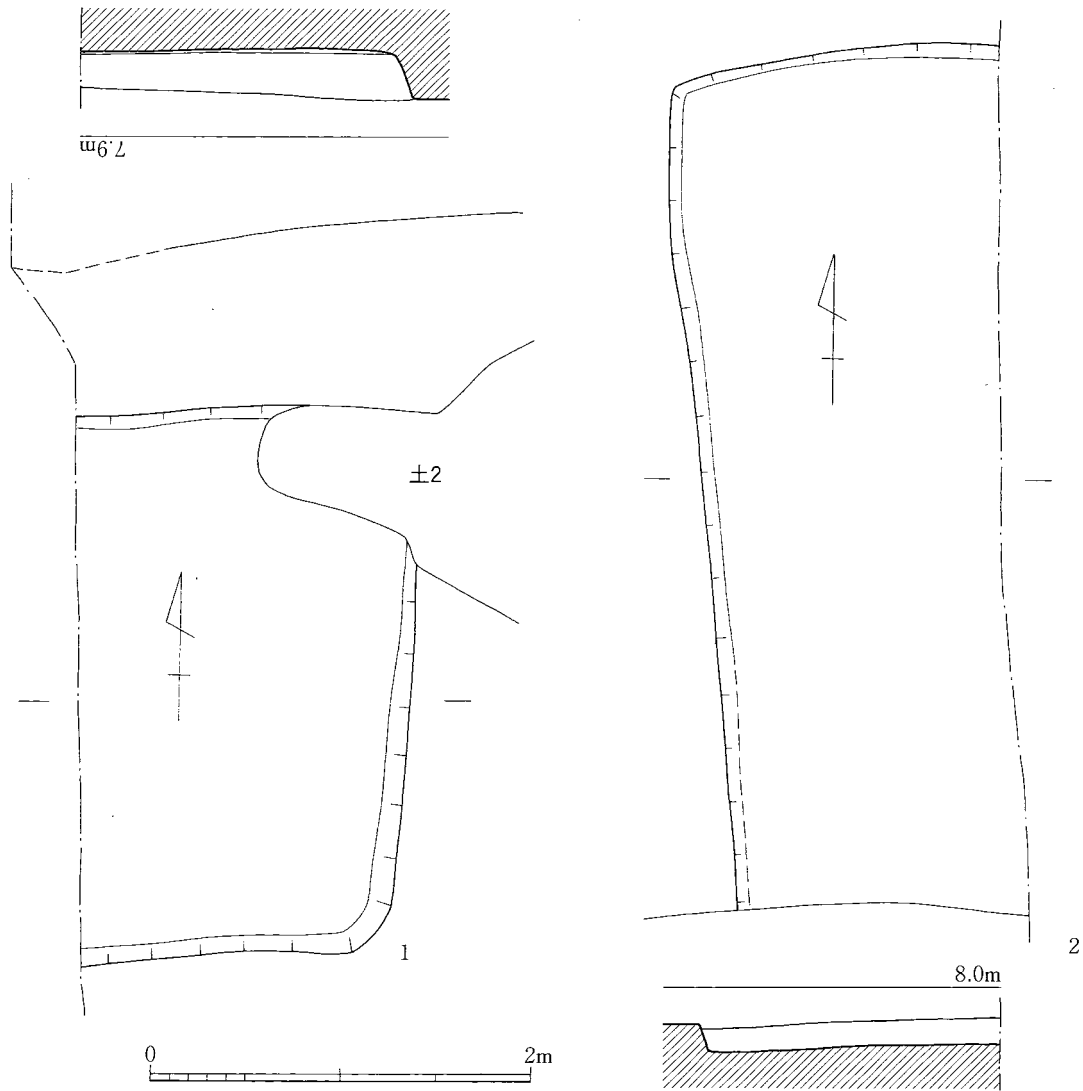
土坑

1号土坑 (図版7、第24図)

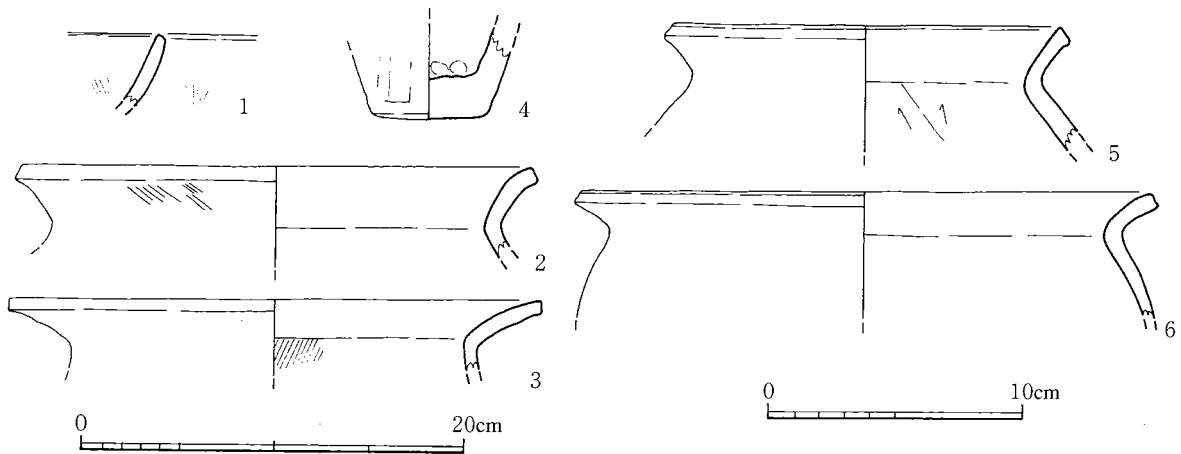
北区南寄りに位置し、2号住居跡より新しい。大部分が調査区外にのび、平面形は不明である。長さ 3.05m、深さ 0.25mを測る。土師器が出土したが、小片のため図示できない。

2号土坑（図版6、第24図）

北区北寄りに位置する。平面形は楕円形であったと思われる。検出時には1号竖穴状遺構との新旧関係が判らなかったが、出土遺物から1号竖穴状遺構よりも2号土坑の方が古い。



第22図 1・2号竖穴状遺構実測図(1/40)



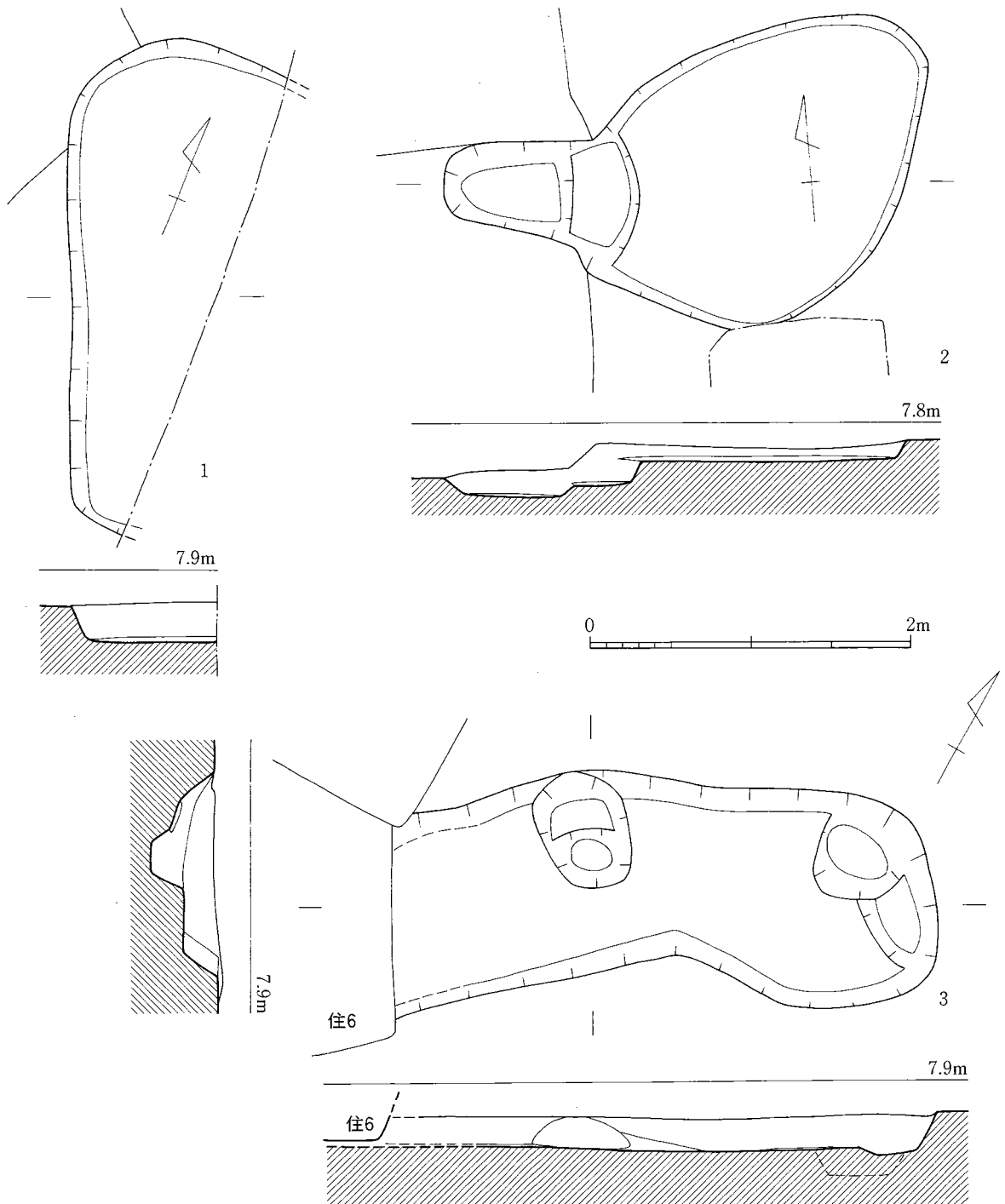
第23図 1号竖穴状遺構出土土器実測図(1/3・1/4)

長さ3.0m、幅1.8m、深さは最深部で0.3mを測る。

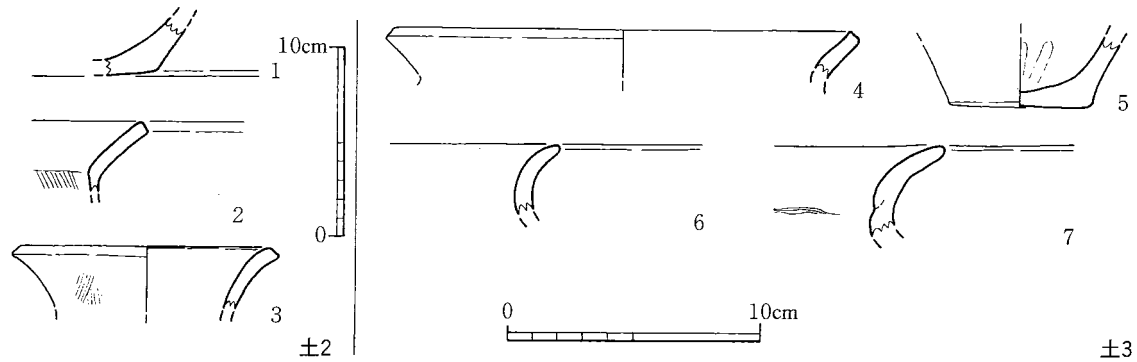
出土遺物（第25図）

1～3は弥生土器である。1は甕の底部小片で、丸底気味である。内外面とも摩滅著しく調整不明。2は口縁部小片。端部は角張って仕上げる。張りのない寸胴であろう。口縁部は摩滅していて調整不明、体部内面はハケメ調整である。口縁部外面に煤が付着する。

3は器台。口縁部は摩滅、外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。復元口径13.0cm。



第24図 1～3号土坑実測図(1/40)



第25図 2・3号土坑出土土器実測図(1/3・1/4)

3号土坑(図版、第24図)

北区北端に位置し、1号竪穴住居跡、6号竪穴住居跡より古い。溝状に長い楕円形を呈する。長さ3.35m以上、幅1.2~1.4m、深さ0.2mを測る。床面が2箇所、ピット状に深くなる。

出土遺物(第25図)

4・5は弥生土器である。4は甕の口縁部片。端部をつまみあげ気味に仕上げる。内外面とも被熱のため赤変する。復元口径24.0cm。5は甕の底部片である。外面は摩滅著しく調整不明、内面はナデ調整で、指頭痕が残る。底径7.0cm。

6・7は土師器甕の口縁部小片である。6は内外面とも摩滅著しく調整不明。7は体部内面をヘラ削りするほかは摩滅著しく調整不明。粘土紐の継ぎ目がわかる、粗雑なつくりである。

溝

1号溝(第26図)

南区南寄りに位置する、東西方向の溝である。幅1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は砂質土、微砂を中心とする。弥生土器が少量出土したが、小片のため図示できない。

2号溝(第26図)

南区南東隅に位置する、北東—南西方向の溝である。調査区に僅かにかかっただけで、溝の幅は不明である。深さは0.8m以上になる。溝の壁際に丸太杭の根元が2本、打ち込まれた状態で残っていたため、比較的新しい溝と思われる。最下層の砂質土は河原石を非常に多く含み、鉄分の沈着も相まって非常に硬く締まっていた。

出土遺物(図版9、第27図)

1は紅皿である。型抜きで作られている。外面の文様は蛸唐草か。口縁部外面から内面にかけて施釉する。胎土は灰白色で密、釉は淡黄灰色。復元口径6.2cm、器高1.8cm、復元高台径1.8cm。2は小椀か皿の底部片である。明るい褐色の釉が畳付きを除く全面にかかり、調整は不明。胎土は灰色で密である。復元高台径5.0cm。3は皿の底部片である。外面は摩滅してわかりにくい、高台を削り出しているようである。内面は蛇の目状に釉を掻き取っていて、残存部は露胎である。胎土は白色でやや粗い。復元高台径4.9cm。

3号溝 (第26図)

北区南端に位置する東西方向の溝である。幅1.8m、深さ0.6mを測る。埋土は灰褐色粘質土、褐色粘質土を中心とする。

土器のほかに台石 (図版9、第32図) が出土している。

出土遺物 (第27図)

4は土師器で小型甕の口縁部片。口縁部は摩滅、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削りである。復元口径12.6cm。

5は須恵器小片。甕であろう。内外面ともヨコナデ。

6は瓦器椀の底部片。内傾する高台をもつ。摩滅著しく調整不明。復元高台径6.0cm。7は瓦質の鉢、あるいは播鉢であろう。内外面ともハケメ調整。8もまた瓦質の鉢である。内外面とも摩滅著しく調整不明だが、外面口縁直下に指頭痕が残る。復元口径22.3cm。

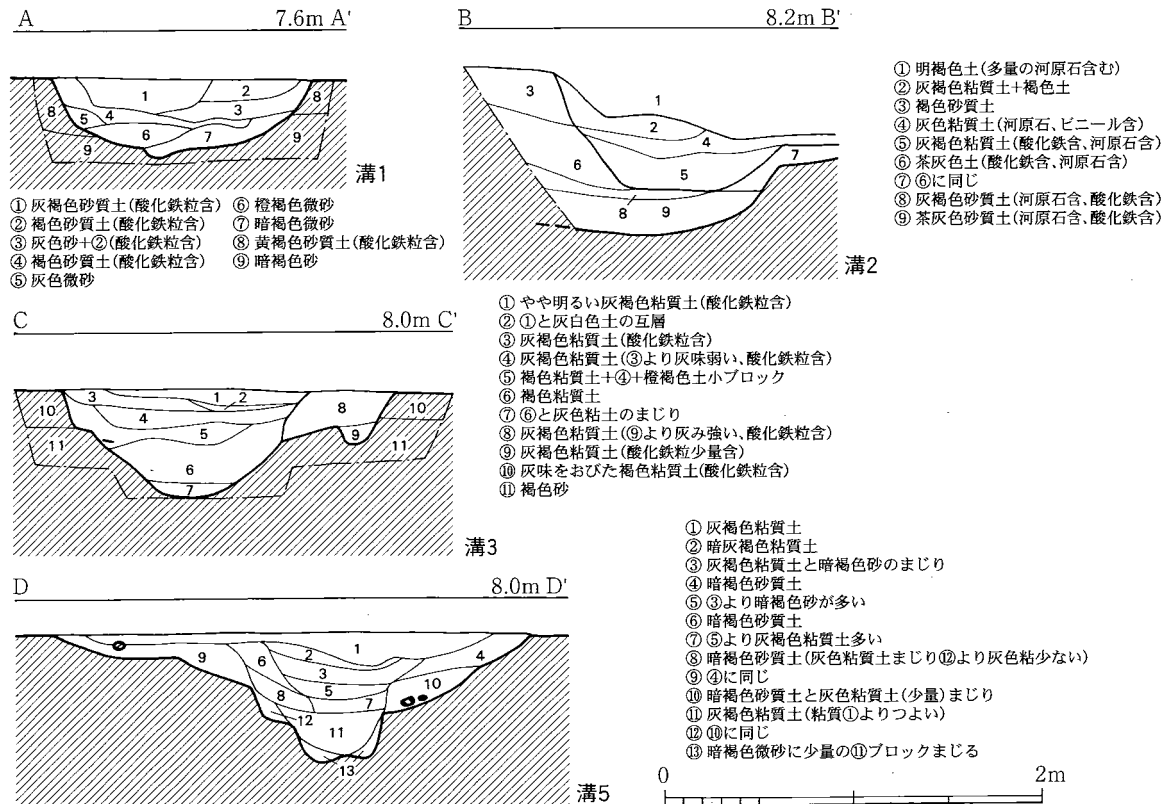
4号溝 (第3図)

北区南寄りに位置する、東西方向の溝である。3号竪穴住居跡より新しい。幅2~3m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色砂質土を中心とする。

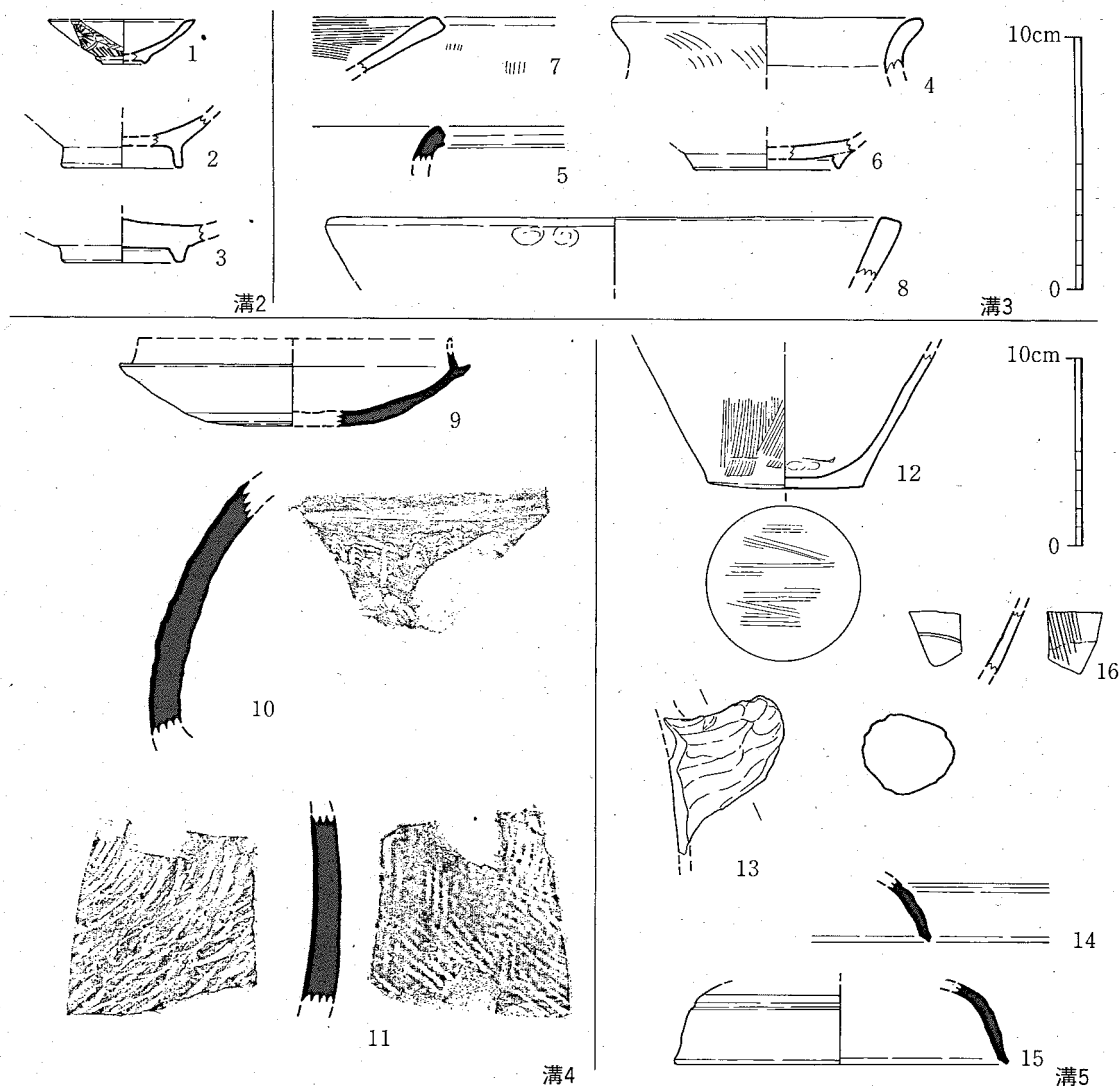
出土遺物 (図版9、第27図)

9~11は須恵器である。9は坏身で、口縁部を欠失する。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデ、ほかはヨコナデ。復元口径12.4cm。

10は甕の頸部片である。内外面ともヨコナデで、外面に波状文を施す。



第26図 1~3・5号溝土層断面図(1/40)



第27図 2~5号溝出土土器実測図(1/3・1/4)

11は甕の体部片である。外面は直線タタキで、内面には同心円文の当て具痕が残る。外面全面に厚く暗緑色の自然釉がかかり、内面にも霧吹き状に自然釉がみられる。

5号溝（第26図）

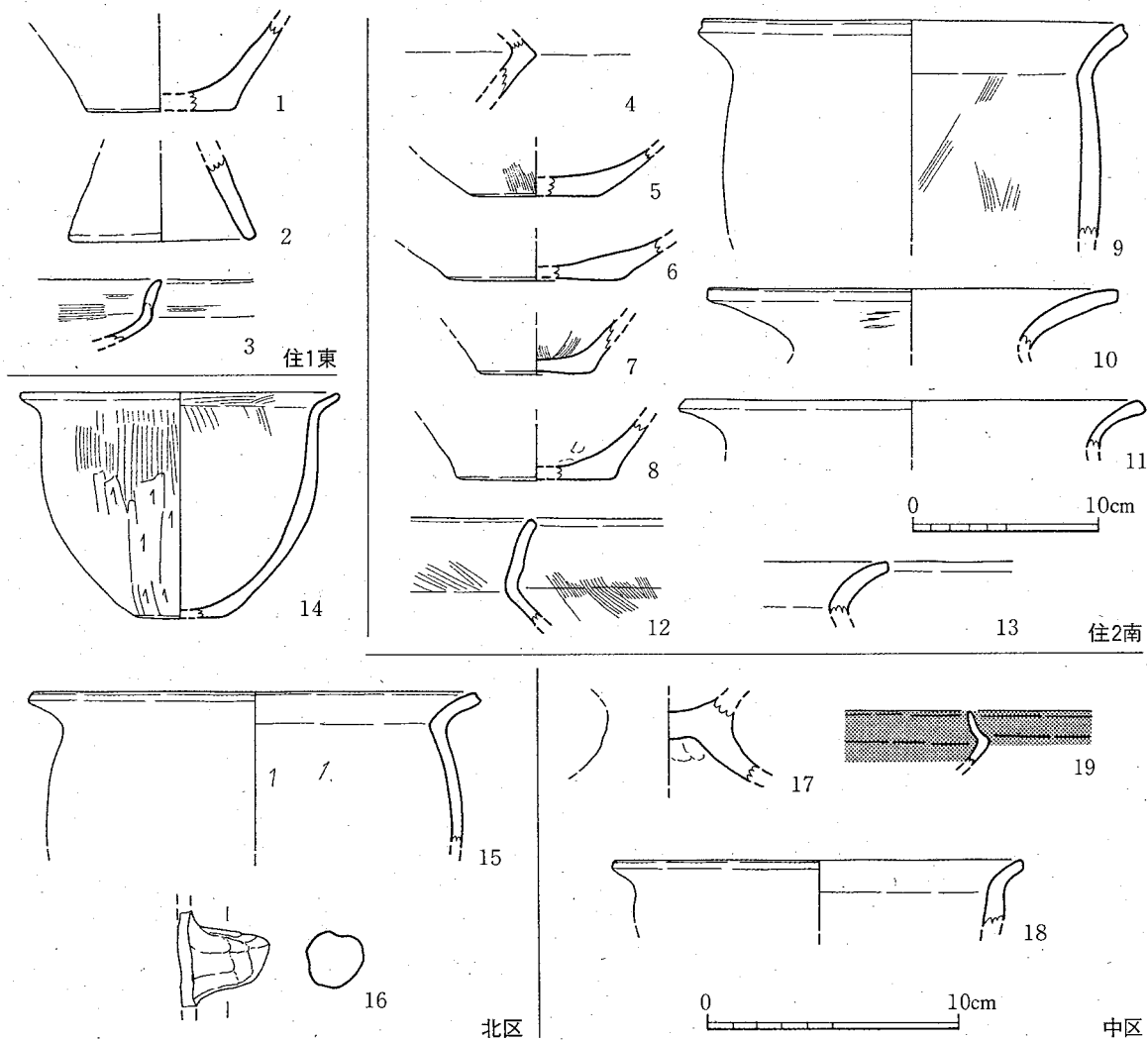
北区北寄りに位置する、東西方向の溝である。6号竪穴住居跡、2号竪穴状遺構より新しい。幅2.3m、深さ0.7mを測る。埋土は灰褐色粘質土と暗褐色砂質土を中心とする。

出土遺物（図版9、第27図）

12は弥生土器で甕の底部片である。外面は、体部から底部にかけてハケメ調整し、体部と底部の境付近をヨコナデ調整する。底部内面はユビオサエするが、体部は摩滅著しく調整不明。底部と体部の境付近に工具痕らしき痕が残る。底径8.1cm。

13は土師器甑の把手部である。外面はナデ調整、体部内面はヘラ削りする。

14・15は須恵器坏蓋である。どちらも口縁部をつまむように仕上げる。14は内外面ともヨコナデである。15は天井部外面が回転ヘラ削り、ほかはヨコナデである。復元口径13.9cmである。



第28図 包含層出土土器実測図(1/3・1/4)

16は同安窯系青磁椀の体部小片である。外面に櫛目、内面は片切り彫りの文様を施す。胎土は灰褐色で密、釉は灰緑色である。

包含層出土土器 (第28図)

1号竪穴住居跡の東、7号竪穴住居跡との中間の位置に、弥生土器片を多く含んだ暗褐色粘質土の広がりが見られた。大きな円形の土坑になるかと思われたが、試掘トレンチを利用して土層を確認したところ、薄く堆積しているだけで遺構にはならないことがわかった。

また、2号竪穴住居跡と4号溝の間にも弥生土器片が多く見られた。竪穴住居跡か土坑ではないかと検出を試みたが、平面形をとらえることはできなかった。遺構である可能性が高いと思うが、2号竪穴住居跡南包含層出土土器として報告する。

ほかに、北区の遺構検出時、中区の遺構面検出時にも土器が出土したので、包含層出土土器として報告する。北区包含層からは土器の他に磨石(第31・32図)が出土している。

1~4は1号住居跡の東側から出土した弥生土器である。

1は甕の底部片である。全体に摩滅して調整は不明だが、体部外面下部はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整。復元底径7.8 cm。2は支脚で、内外面ともナデ調整である。復元脚部径9.4 cm。3は高坏の坏部であろう。口縁部が短く外反する。内外面とも摩滅しているが、ミガキ調整である。

4~13は2号住居跡の南側から出土した。

4~11は弥生土器である。4は二重口縁壺の口縁部片で、内外面とも摩滅著しく調整不明。5・6は壺の底部片。5の体部外面はハケメ調整、底部外面はナデ調整、内面は摩滅著しく調整不明。復元底径6.6 cm。6は全体に摩滅著しく調整不明。復元底径9.0 cm。

7・8は甕の底部片である。7の外面は摩滅して調整不明、内面はハケメ後ナデ調整。外面全体が被熱のため赤変している。また、底部外面にススが付着している。復元底径6.0 cm。8の体部外面はナデ調整、底部外面と内面は摩滅著しく調整不明。底部内面に指頭圧痕が残る。復元底径8.2 cm。9~11は甕の口縁部片。9は口縁端部をくぼませる。口縁部から体部外面は摩滅著しく調整不明。体部内面はハケメ調整である。復元口径22.2 cm。10は端部を角張り気味に仕上げる。内外面とも摩滅著しく調整不明。外面に工具痕と思われる痕が残る。口径21.6 cmに復元したが、やや口径が小さいか。11は端部を角張って仕上げる。内外面とも摩滅著しく調整不明。復元口径24.4 cm。

12・13は土師器である。12は小型の壺の口縁部片である。口縁部外面は摩滅、内面はハケメ調整後ヨコナデ調整、体部外面はハケメ調整、内面は摩滅して調整不明。全体に被熱のため赤変している。13は甕の口縁部小片で、全体に摩滅著しく調整不明。

14~16は北区包含層から出土した。

14は弥生土器の鉢で、底部は丸底気味である。口縁外面はヨコナデ調整、内面はハケメ後ヨコナデ調整。体部外面は上半にハケメ調整を施した後、底部から下半をヘラ削りする。内面はハケメ後ナデ調整である。復元口径16.8 cm、器高12.0 cm、復元底径4.8 cm。

15は土師器の甕で、口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面は摩滅著しく調整不明、内面はヘラ削りである。復元口径17.6 cm。16は小ぶりの把手である。把手部はナデ調整だが、体部内面は摩滅著しく調整不明。把手部の径は約2.0 cmである。

17~19は中区包含層から出土した。

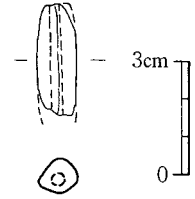
17は弥生土器の甕の底部片である。底部外面に指頭圧痕が残るほかは摩滅著しく調整不明。18は弥生土器の鉢である。全体に摩滅著しく調整不明だが、体部内面にごく僅かにハケメが残る。復元口径21.8 cm。

19は土師器で模倣坏である。内面から受け部にかけて炭素が吸着している。全体に摩滅著しく調整は判然としないが、ミガキ調整のようである。

その他の遺物

出土土製品 (図版9、第29図)

土錘である。端部を欠失し、裏面は若干削られている。全体に摩滅が著しい。残存長 2.95 cm、最大径 1.0 cm、孔径 0.3 cm、重さ 3 g を測る。北区試掘トレンチ出土。



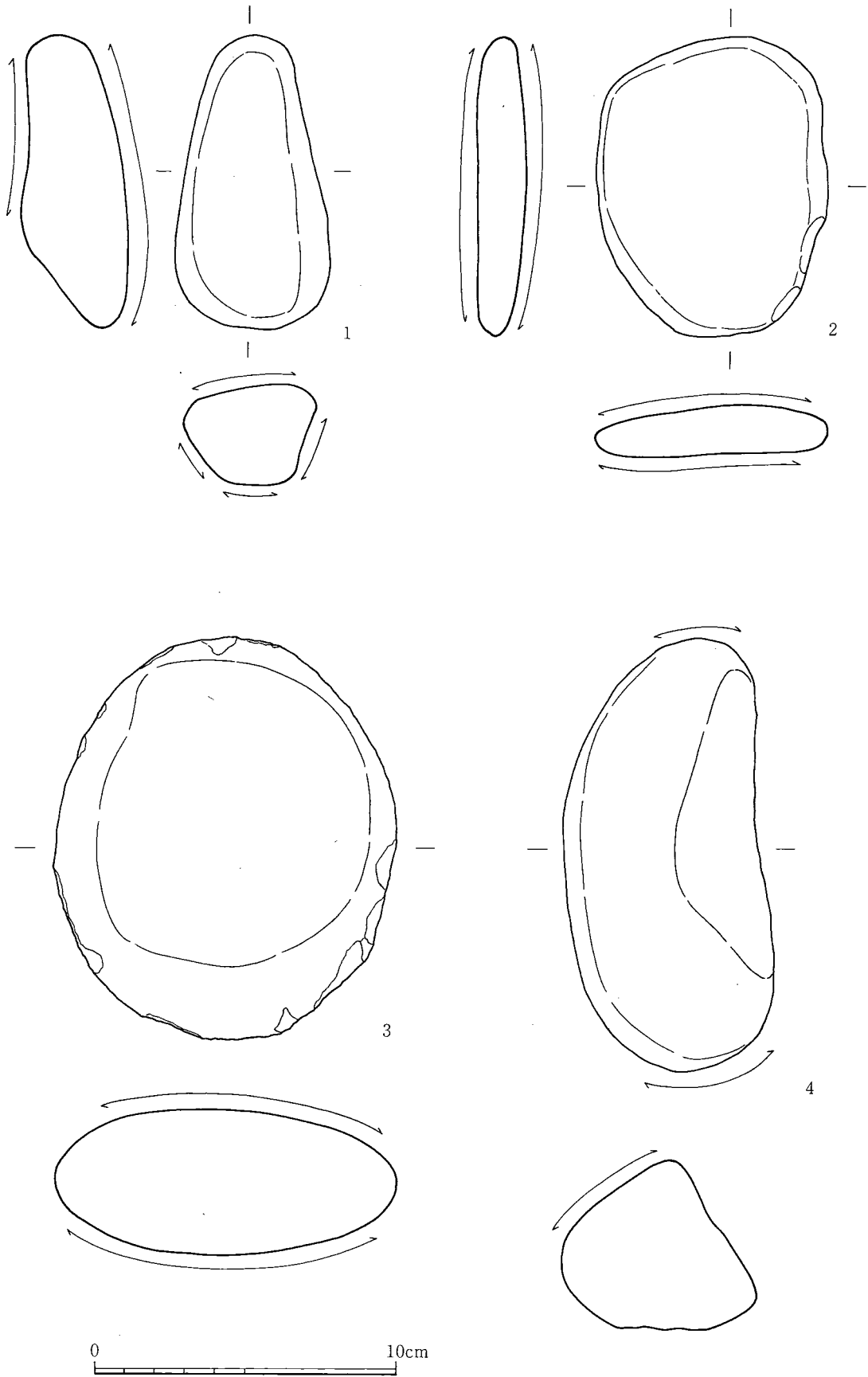
第29図
出土土製品実測図(1/2)

出土石製品 (図版9、第30・31図)

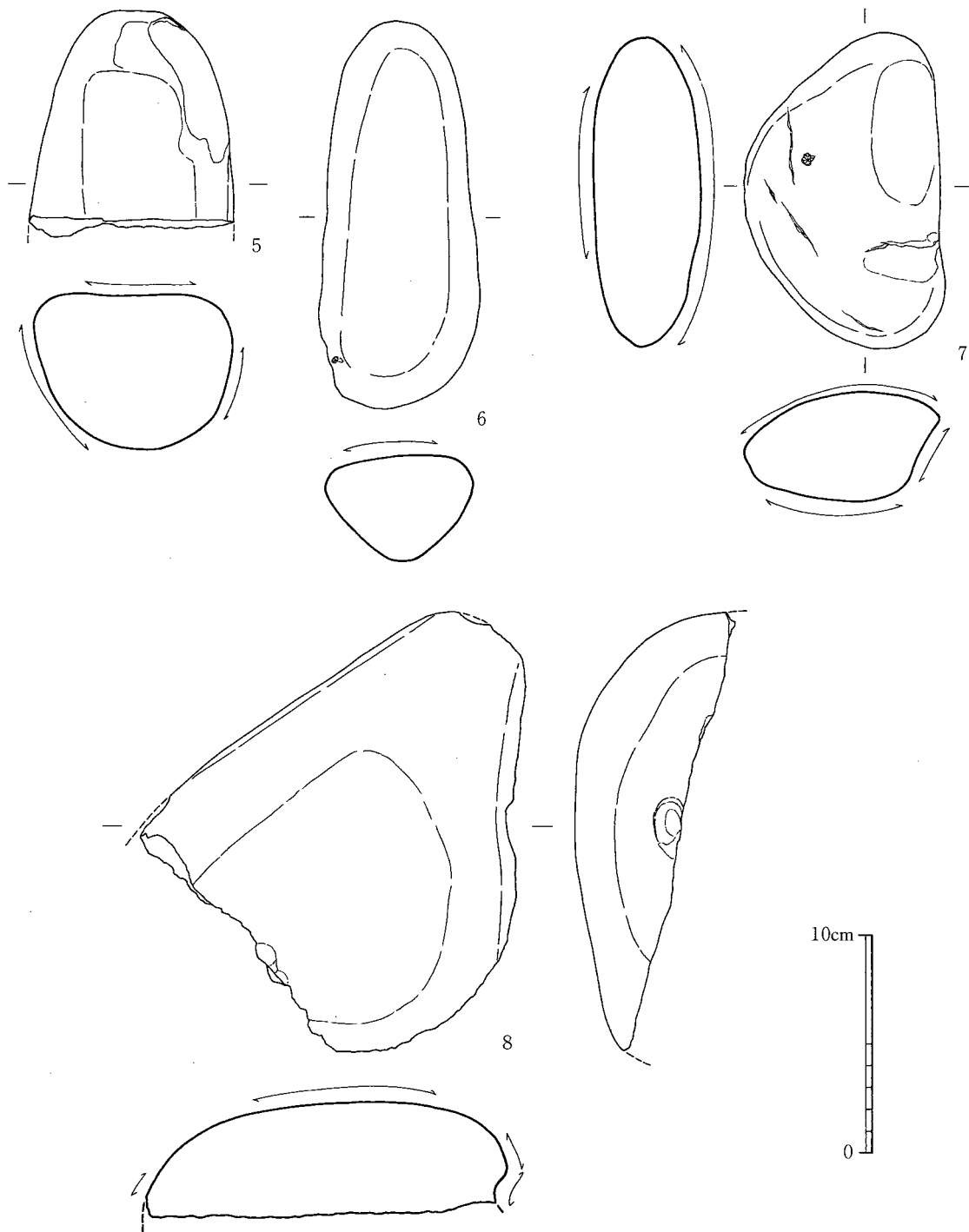
1は砥石と思われる。断面が不整形を呈し、どの面も使用しているが、使い込んだ風ではない。長さ 9.7 cm、幅 5.2 cm、最大厚 3.45 cm、重さ 236 g を測る。砂岩製。北区包含層出土。

2～7は磨石である。2は扁平で、両面とも磨れている。長さ 10.0 cm、幅 7.7 cm、最大厚 1.7 cm、重さ 198 g を測る。安山岩製。3号住居跡床面近くから出土した。3も両面とも磨れている。長さ 13.4 cm、幅 11.5 cm、最大厚 4.8 cm、重さ 1027 g を測る。安山岩製。2号住居跡出土。4は棒状で、両端と上面が磨れている。長さ 14.4 cm、幅 6.5 cm、最大厚 6.0 cm、重さ 785 g を測る。安山岩製。3号住居跡床面近くから出土した。5は下半を欠失している。上面を含む3面が磨れている。残存長 10.5 cm、幅 9.2 cm、最大厚 7.0 cm、重さ 917 g を測る。安山岩製。北区包含層出土。6は棒状で上面のみよく磨れている。長さ 17.8 cm、幅 7.4 cm、最大厚 5.1 cm、重さ 989 g を測る。安山岩製。北区包含層出土。7はもっと大きな石材であったものが欠けた後も使用しており、ほぼ全面磨れている。長さ 14.5 cm、幅 9.0 cm、最大厚 5.0 cm、重さ 894 g を測る。安山岩製。3号住居跡床面近くから出土した。

8は台石である。大部分を欠失している。上面と右側面が磨れている。また、右側面にはくぼみがあり、くぼみの内部も磨れている。残存長 20.3 cm、残存幅 17.4 cm、重さ 2750 g を測る。安山岩製。3号溝出土。



第30图 出土石製品実測図①(1/2)



第31图 出土石製品実測図②(1/3)

第4章 おわりに

本遺跡が立地しているのは、前章の遺跡の概要でも述べたように、矢部川が形成する自然堤防と後背湿地が入り組んでいる地帯であり、縄文時代から鎌倉時代までの幅広い時期の遺構、遺物が確認されている。

本遺跡で検出した遺構の時期を整理しよう。

まず、弥生時代後期前半の遺構に6・7号竪穴住居跡、2号竪穴状遺構、2号土坑、1号溝がある。2号竪穴状遺構と1号溝は時期の判断ができる土器片に乏しいが、出土土器はいずれも弥生土器であるため当該期と判断した。2号竪穴住居跡の南から4号溝にかけて、当該期の弥生土器がまとまって出土した。前章で報告した通り、検出に至らなかったが竪穴住居跡であった可能性が高い。また、他の遺構から数点の弥生土器が出土していることを考えると、検出することができなかった当該期の遺構が他にもあった可能性がある。明確な遺構は検出されなかったが、包含層出土土器や混入品の中には弥生時代後期後半の特徴をもつ土器もあり、弥生時代後期を通じて集落が営まれたと考えられる。

次は古墳時代の遺構で、1～5号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構、1・3号土坑、4号溝である。

この中で最も古いのは3号住居跡である。他の住居跡の主軸が北へ40°前後ふれているのに対し、3号住居跡は北に50°ふれる。また、出土土器の特長も一段階古い様相を呈している。6世紀前半代であろう。ほかの4軒の竪穴住居跡はいずれも6世紀後半代であろう。切り合い関係にはあるものの、そう間をおかずに建て替えられたようである。1号土坑、4号溝もこの時期に該当する。3号土坑、1号竪穴状遺構は出土土器が少なく、細かい時期の判断は難しいが、どちらも6世紀代の遺構である。この時期の集落は、6世紀前半代に出現し、7世紀に入る前に断絶したもようである。

しばらく間が空き、次に見られる遺構は中世のもので、3号溝と5号溝である。出土遺物が豊富ではないので時期の決定は迷うところだが、13世紀初め頃であろうか。本遺跡周辺は坂田荘であったと推測されるが、その成立時期は不明であり、文書中にその名が出現するのはようやく14世紀半ばになってからである。よって、この溝が直ちに坂田荘と関わる遺構であるとは言えないまでも、水田に伴う水路であったと考えるのが自然であろう。

近世以後の遺構に2号溝がある。他の4条の溝が東西方向であるのに対して、この2号溝のみが方向が異なる。やはり水路であったと考えているが、中世以前とも、またほ場整備を終了した現在とも、全く方向性が異なるのは何故だろうか。

本遺跡は弥生時代後期と古墳時代後期前半の集落であることが確認できた。後世、水田の維持管理のために多くの遺構が削平されたようで、集落の広がりまでは確認することができなかったが、微高地上に多くの集落が営まれたものと推測される。そして試掘調査結果と考え合わせると、本遺跡は矢部川に最も近い集落のようで、これより北は矢部川の氾濫原であったと考えられる。古墳時代以降に建物跡が認められないことは、水田化の進行を示していると解釈したい。現在の集落が中世、坂田荘まで溯る可能性もあるだろう。

版 圖



調査区遠景
(空中写真 北を望む)



調査区北区全景
(空中写真)



1号竪穴住居跡（東から）



1号竪穴住居跡カマド（東から）



2号竪穴住居跡（東から）



2号竪穴住居跡カマド（東から）



3号竪穴住居跡（東南から）



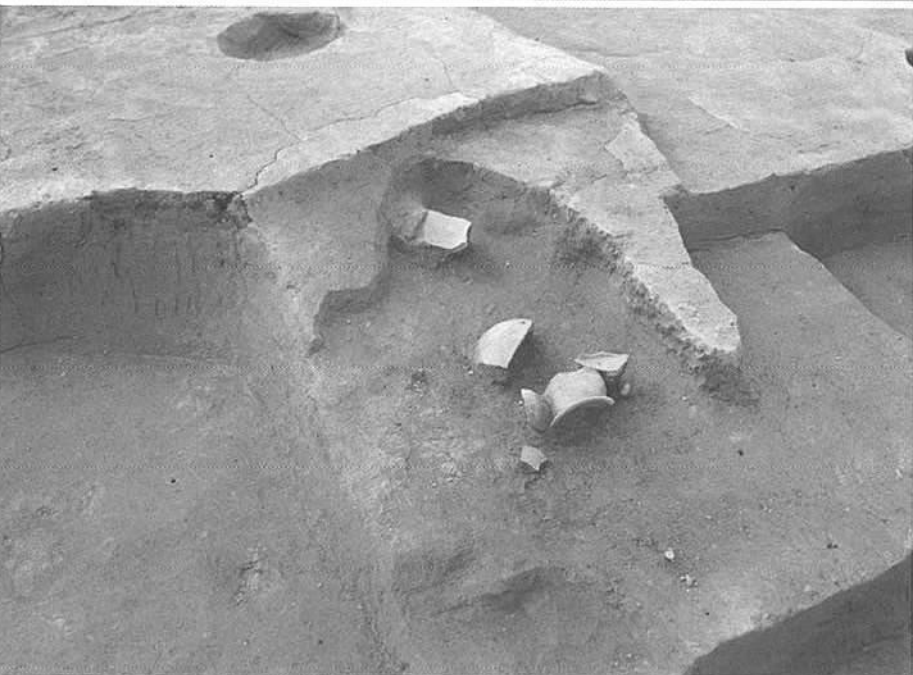
3号竪穴住居跡カマド（東南から）



3号竪穴住居跡カマド（東南から）



4号竪穴住居跡（東南から）



4号竪穴住居跡カマド（東南から）

5号竪穴住居跡（東から）



5号竪穴住居跡カマド（東から）



6号竪穴住居跡（東南から）





7号竖穴住居跡（東から）



7号竖穴住居跡完掘状況（東から）



1号竖穴状遺構・2号土坑（西から）



2号堅穴状遺構 (東から)



1号土坑 (東から)



3号土坑 (南から)



6-3



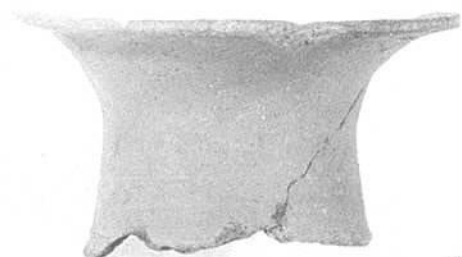
12-13



6-5



12-16



12-1



15-1



12-7



15-9



15-10



12-10



15-12



12-11



15-6



21-7



27-9



21-5



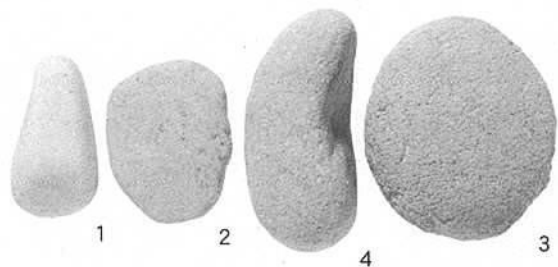
27-16



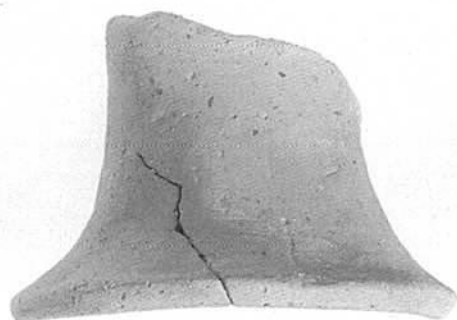
29-1



21-8



第30図



21-9



第31図



27-1



31-8

報告書抄録

ふりがな	ぐんりょうのいちいせき							
書名	郡領ノ一遺跡							
副書名	福岡県山門郡瀬高町所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係文化財調査報告							
シリーズ番号	4							
編著者名	今井涼子							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / "	東経 ° / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぐんりょうのいち いせき	福岡県山門郡瀬高 町大字坂田2557・ 2565・2567	40561		33° 09' 10"	130° 29' 40"	2004. 5. 6～ 2004. 9. 27	1,107m ²	鉄道建設 (九州新幹 線)
郡領ノ一遺跡								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
郡領ノ一遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代	竪穴住居跡、 竪穴状遺構、 土坑、溝	弥生土器、須恵器、 土師器、陶磁器、 瓦器、土製品、石製品				

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2114107
登録年度 17	登録番号 3

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集

郡領ノ一遺跡

平成18年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 有限会社 プラネット印刷
北九州市小倉北区木町1丁目7番19号